

64-265



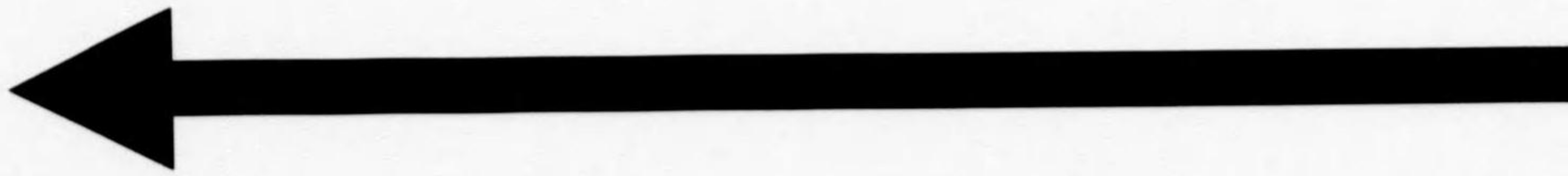
1200501278147

64

265



始



H3T-98

64-265

川路聖謨文書 第七

目次

一座右日記

自万延元年四月朔
至文久三年十二月三十日

一頁

○安政五年四月京都より歸府するや五月六日西丸留守居に貶され尋て翌年八月廿七日其職を免せられて退隱蟄居を命ぜらる依て敬齋と稱し嫡孫太郎(寛堂)家督を承く是より謹慎固く身を持して是一步も戸外を踏まず専ら讀書練武に閑日月を送れり然るに世態漸く逼迫するや文久三年五月十一日再び召されて外國奉行に擧られしが同十月三日老疾を以て職を辭し再び閑地に就けり此日記は即万延元年四月以降の身邊瑣事を記したるものなり

一千里飛鴻

自文久三年四月八日
至同年七月二日

一九五

○文久三年二月十三日嫡孫太郎將軍の上洛に扈從して上京し同年七月三日歸府す仍ち兒孫愛慈の情に堪えず江戸の近情を巨細に録して之に贈り言々句々奉公の大義を戒むるもの即此日記なりとす

目次

一

一 慈恩集錄

自文久三年十二月廿七日
至元治元年五月二十日

三〇九

○文久三年十二月廿七日嫡孫太郎の將軍再度の上洛に隨ひて上京せるに筆を起し翌年五月二十日の歸府に筆を擱く此日記亦上例の如く滯京中の太郎に脚送せるものを後集成せるものなり

一つくしのひなみ

自慶應元年七月廿五日
至同 年八月十六日

四〇一

○此日記も恐らく上例に類するものならんも首尾散逸せるもの、如く今その外題の謂を詳にせず

一 東洋金鴻

自慶應二年十月廿一日
至同 四年三月七日

四一一

○慶應二年二月十二日聖謨俄に卒中にて倒れ爾來身を病床に横へ世の有爲轉變を嘆じたりしが同十月廿一日嫡孫太郎英國留學生取締として英國に派遣せらるや聖謨病筆を驅つて日間の瑣事を遠く在英の愛孫に報す即此日記之を集成せるもの今慶應三年六月迄を此輯に載せ以降は次輯に收む



座右日記

朔日經義	國學	九日經義	漢學	十七日經義	國學	廿五日經義	漢學
二日同	漢學	十日同	兵書	十八日同	漢學	廿六日同	同
三日同	同	十一日同	國學	十九日同	同	廿七日同	國學
四日同	國學	十二日同	漢學	廿日同	兵書	廿八日同	漢學
五日同	漢學	十三日同	同	廿一日同	國學	廿九日同	同
六日同	同	十四日同	國學	廿二日同	漢學	晦日同	兵書
七日同	國學	十五日同	漢學	廿三日同	同	朝春米掃庭則減居 合以下	
八日同	漢學	十六日同	同	廿四日同	國學	國詩詩文每日自未 及暮	

座右日記 (萬延元年四月)

一

萬延元年申四月閏三月改元

○朔日 晴

○二日 晴 高山隼之介來る○松村忠四郎來る横濱村を歸府也英佛の夷日本の馬を買ふ七百に及ぶ厩百疋建七棟有と物語る

○三日 晴

○四日 くもり又雨 昨日羽倉外記市川弁吉内藤幸三郎富塚順作來る幸三郎は市三郎と談し也

○五日 雨 市三郎事に付幸三郎來る

○六日 晴 末子新吉郎箸取初いたす元家來富塚順作御鍵同心となり候
本日引移に付夜食遣す○信濃守市川弁吉高山母來る

○七日 晴 浴 山内八郎齋藤源藏并次男犬塚庄藏小林金藏根津肇富塚順作市野秀三郎來る太郎學問所を井上へ參る

○八日 雨 土岐啓之介佐渡へ出立暇乞として來る金貳分遣す



○九日 くもり 太郎當番ヨル齋兒病氣に付見舞遣す

○十日 雨 隠居御禮之義例有は可願旨組頭申聞候旨太郎申聞る

○十一日 晴 冷氣也 市三郎事に付内藤幸三郎來る爲相談井上へ遣す市川恒吉御金納手形之義に付來る俊藏面會○今般御吹立之小判貳分判壹分判貳朱金昨日を通用之由に雨替屋より來る

○十二日 雨 長峯良三郎市川弁吉松村忠四郎來る弁吉は晝飯忠四郎夜食并酒差出す夜に入候原田市三郎養母新一郎病氣之由申來る則家來高村俊藏遣す痢症取昇候躰也と之事醫桂城恒庵懸候由に相談也金四分用立遣す

○十三日 くもり 信濃守唐番をくれ申候○水野筑後守を兼定兼元の大

小返却有之候すし一折來る挨拶遣す

○十四日 晴 内藤幸三郎來る夜食并酒差出す

○十五日 くもり 清兵衛を松魚をくれ申候○市三郎養父新一郎病氣に

付見舞遣ス

○十六日 晴 荆妻不快○大津音次郎來る折枝○淺田宗伯來る新吉郎不快故也

○十七日 くもり 巳刻地震微也○太郎講武所に參る○長峯良三郎桂城恒菴高山隼之助永田一琴來る

○十八日 雨

○十九日 くもり 太郎當番

家督御禮

○廿日 晴風 富塚順作來る大工清兵衛方の佛前の油揚遣ス○太郎安富先生へ參る○太郎明日家督御禮に付登 城候様頭を達し有之爲御受參る

○廿一日 太郎六半時のしめ半袴に参登 城乗馬也家督之御禮也右に付井上信濃守其外親屬元家來共等來る酒肴等差出今日雨又くもり也

○廿二日 くもり又晴

松村忠四郎并良右衛門來る土屋鏡四郎大膳亮名代兼候來る

○廿三日 雨 松岡千次郎上田喜久馬來る○敬次郎弓術門入として安富に參る

○廿四日 くもり 認物いたす

○廿五日 雨 隱居所之繕出來候を今日引移る末子新吉郎のほり立初也

○大工清兵衛が太郎御禮之祝として肴差出す○家來共等の酒差遣す

○廿六日 快晴冷氣也 永井玄蕃頭より詩作來る昌藏持參也○内藤幸三郎大越貞五郎今泉獻藏家督御禮之賀として來る酒肴差出

○廿七日 くもり 北條松之丞來る

○廿八日 雨 太郎御禮之賀末兒新吉郎初端午之賀として所々を到來物

有之○今泉獻藏并舊婢源婆來る

○廿九日 晴 保小一五九令貳△貳〆貳五四三八六五差三石貳五大計貳

貳十順作來る勘定違有之候廉爲相直候を小印○高山隼之助來る箕作阮甫

同斷大熊鏡之助同斷

英新聞誌

- 五月朔日 くもり 閏三月六日本邦板行に水府元御家來掃部殿へ及狼藉旨之イキリス人新聞昏阮甫可返却○石川獻藏來る○松谷金百貳拾六兩取寄る内百兩は大工に渡す
- 二日 雨 來人なし所々を太郎の御禮并新吉郎之賀來ること昨日の如し
- 三日 くもり 窪田治部右衛門内藤幸三郎豊太郎石川獻藏來る○新吉郎之祝ひ昨日の如し且所々の同人之くはり物いたす
- 四日 くもり 兩三日已來地屢震ふ尤少々宛也
- 五日 くもり 端午人々來る○家來共一統より太郎の祝として交肴差出ス○井上并内藤父子來る
- 六日 雨
- 七日 曇 石川獻藏横山鐘カ庄三郎來る

- 八日 くもり 石川獻藏より菓子をくれ候○根津金次郎アメリカを去ル五日浦賀迄歸帆之爲知來る
- 九日 雨 荆妻松村忠四郎方に參る同人母八十八之賀によりて也○根津金次郎アメリカより歸帆候而來る
- 十日 雨 高橋をサンフランスコイより持歸候西瓜を賜られ候○松村かうなき來る同人方の手製之蕎麥遣す○前田夏蔭方後藤一乘之賀文直し來る一琴方に遣す
- 十一日 雨午後大風雨 右に付妻を迎に不遣○大越老母を魚をくれ申候
- 十二日 晴風 妻九前に歸宅根津金次郎アメリカよりの土産をくれ候
- 十三日 雨 柏もちをつくるこな壹斗三升米八升かくの如し○永井玄蕃頭之詩和韻いたし候而遣す
- 十四日 晴風 太郎聖堂に出る

○十五日 雨東北風に冷氣六十五度也 石川獻藏來舊婢孫兒を設たり
 とて伴ひ來る

○十六日 雨東北風冷氣昨日の如し○宮崎精一郎來る手製之茶をくれ
 候

○十八日 くもり六十三度之冷氣也 塚越大藏少輔宮崎精一郎來る

○十九日 雨又晴 松村忠四郎金川に引越候に付爲暇乞來る酒差出ス富
 塚順作犬飼新藏并同人兒來るいづれも飯爲給候

○廿日 雨又晴 土屋大繕亮來る○太郎當直

○廿一日 晴又くもり○永田義次郎富塚順作來る

○廿二日 原田市三郎來る根津肇來る○雨又くもり

○廿三日 雨昨夜雷且大雨○太郎を塚越大藏少輔方の遣ス○井上より文
 通有之候○御軍艦練所教授方牧野越中守家來小野友五郎と申候もの測
 量達者に亞人と相測量二千里余に一ミウト二分五リ之差而已に付亞

原田市三郎
心願

測量

耳ノ藥

人感服いたし候而彼國之人面會をもとめ候由其もの咄にては洋銀一枚は
 凡六七々に相當り候に付洋銀に交易いたし候而は七倍之損に相成候由

○内藤幸三郎同豊太郎松村良右衛門木村董平來る同人は菓子をくれ候幸
 三郎外貳人食事いたし候

○廿四日 くもり又晴 石川獻藏富塚順作來る同人方の太郎參候而心願
 話いたし候由申聞る○新家之玉落受取候

○廿五日 晴又くもり 宗伯來る眼精液減したるに金匱に有磁石丸とい
 ふものよろし磁石眞砂地黃也と云○岡田備後守來る

○廿六日 晴又くもり八十五度正午 恒庵方の昨日之藥問に遣す○市三
 郎方の六月之雜用遣ス

○廿七日 くもり又晴八十八度

○廿八日 後藤一乘方の同人七十の賀の詞書あるうた并堅魚を遣す○富
 塚順作太郎之事に付來る○葛城恒庵來る同人耳の考大黃 中黃連 中黃芩 中

桂枝中甘草大茯苓大蒼木大蔓荊子大

○廿九日 快晴九十度の暑也也甚也暑

同斷

○六月朔日 快晴○桂城恒庵より藥方來る磁石丸治雷風内障頭旋惡心嘔吐磁石燒赤酢滓二次五味子牡丹皮乾姜玄參各一兩附子炮半兩右爲末煉蜜丸如桐子大食前茶下十九並丸藥にてもよろし

○二日 晴夕雨土用入 大越定五郎高山隼之助石川獻藏來る

○三日 くもり八十六度○富塚順作來る高橋良三郎同斷

○四日 晴八十八度魯九十一度和 昨日大越お五郎祖母病氣之由申 來る覺松院善徳貞安大姉 即刻參る老母六時病死おさと參候は五ツ時にて其事間に合不申候○

大越老母卒

今日參候面々土屋大膳亮鈴木日向守其外也いづれも暑中也○太郎大越へくやみに參る○原田市三郎來る

○五日 晴九十度○荆妻老母葬式濟にて歸宅○奥山末五郎山内八郎來る

○六日 晴八十九度 松村忠四郎松村良右衛門北條平次郎來る

○七日 晴 大津音次郎原田市三郎來る水野良助來る同人本家水野土佐

守家老御取上在所にお蟄居被仰付候お一昨日は右お屋敷に參候由也

○八日 くもり八十二度 大越へ七日お法事に老妻參る香典五百疋

○九日 くもり夕雨晚雷八十二度○妻大越お歸る○友野肩吾内藤幸三郎來る

○十日 くもり又雨東南風八十二度午四分七十八度に下る九十二度甚暑

之測器也

○十一日 晴又雨八十七度○富塚順作永田義次郎來る

○十二日 くもり又雨八十一度○井上元吉來る○土浦家來上田角右衛門

病死に付くやみの歌に香一等添遣す

○十三日 七十六度○石川獻藏市川弁吉來る

○十四日 はれ又曇○舊婢共五人來る○淺田宗伯内藤豊太郎横山鐘三郎

其外來る ○朝七十二度午後八十三度
○十五日 くもり辰七十六未八十五 ○山王祭禮有之候例之通之由也 ○敬
次郎道中日備貞吉方の祭禮見物に參る ○宣女兒孫貳人來る ○大槻俊齋來
る

○十六日 晴八十九度之暑也 ○羽倉外記來る
○十七日 晴九十度之暑午後也 宣女今日歸申候
○十八日 晴微風九十度之暑^半 ○上田菊麿來る ○山本新十郎の使遣す
○十九日 晴八十七度之暑也 ○石川獻藏來る 原田市三郎來る
○廿日 くもり ○内藤幸三郎來る ○第郊中坊弱水在都坊亡八剃頭緒輪里
肆 ○前田夏かけ高山隼之助母來る
○廿一日 暑昨に同じ 今日太郎の部や其外出來候而人々引移
○廿二日 晴あつさ昨日の如し
○廿三日 晴同上 ○原田市三郎來る

西丸下出火

市三郎御目見

○廿四日 晴 松村良右衛門來る 吉田柔輔來る さかなをくれ申候
○廿五日 晴 今曉西丸下御作事方小屋場消失 ○九ツ時八十一度之暑也
未前八十四度に進 ○大越貞五郎富塚順作來る
○廿六日 晴 八十五度石川獻藏來る ○昨日原田市三郎初御目見
○廿七日 晴 九十二度之暑 ○内藤幸三郎來る
○廿八日 晴 九十二度甚暑未刻辰刻八十七度 ○原田市三郎來る
○廿九日 晴 東北風昨日也 九十一度之暑也 ○高山隼之介來る
○晦日 晴九十度兩度白雨 内藤幸三郎來る

○七月朔日 晴風九十二度之暑也
○二日 晴 井上信濃守來る 夜冷氣也
○三日 晴又くもり朝七十四度午後七十六度 内藤幸三郎來る
○四日 くもり辰刻七十二度

○五日 晴八十六度○内藤幸三郎富塚順作來る
 ○六日 晴朝七十六度八ツ時九十度○無來人
 ○七日 晴 石川獻藏松岡千次來る
 ○八日 晴辰七十九度未八十七度○なら人來る助藏也物遣す佐州人佐助
 之忤來るもの遣す

元興寺塔燒

○九日 晴申刻微雨 開闢院様御七回忌に付人々へ食事等爲致候
 ○十日 晴○八日なら人話に元興寺之塔一寸はかりわきの桶屋より出火
 いたし塔へ飛火燒失之由此塔は日本塔之はしめ聖德太子御建立に而日本
 在來たて物にかゝるものはなしなら人大にかなしみ候由
 ○十一日 曇 開闢院様七回御忌に付荆婦玉林寺に參詣太郎は昨日參る
 自分は外出いたし不申候に付參詣いたし不申候○耶蘇降世一千八百五十
 六年合衆國士人禪理哲撰といふ序ある地球説略といふ書をみる一冊百十
 枚有唐本白帄すりのことしよく帄をみるに西洋瀝白帄也

禪理哲撰地
理説略

清人海防上
書

○十二日 風雨 清國親王僧格林沁リスエインケ并段兆鏞の上書をよむこの
 僧格林沁ハ咸豐帝の叔父ニテ六十歳位ノ人ト風説書躰ノ別帄ニアリ
 ○十三日 晴候而風 内藤幸三郎來る○井上大久保喜右衛門之事昨日
 申越に付今日同人方の使者高村俊藏遣す○内藤幸三郎來る
 ○十四日 晴 大久保喜右衛門が美濃帄來る昨日之うつり也○井上信濃
 守内藤豊太郎市川弁吉富塚順作大津音次郎來る順作音次郎には金貳百疋
 ツ、遣し候其余之人々は酒并飯差出之○キナ鹽一瓶求之
 ○十五日 晴 人々今日來候を誤る昨日之所に記す
 ○十六日 くもり○太郎岡田新五太郎方の參る○敬次郎内藤に參る
 ○十七日 くもり折々雨八十九度午刻也○永井能登守來る○高橋良三郎
 矢土嘉左衛門家内來る
 ○十八日 晴風少々 不快に付書見なし○菊間來る○三輪女が魚を贈る
 ○永井能登守より後三年之畫卷物三卷來るこれはふるく家に傳ふるよし

也

○十九日 くもり 來人なし

○廿日 くもり 松村忠四郎家内并娘金川の引越候に付爲暇乞來る内藤幸三郎富塚順作來るいづれも食事差出○キナ鹽一瓶來る壹兩壹分也忠四郎世話也○去ル十九日種痘館醫之もの來りて町觸出候旨申之これはわれ發起人之故を以也○今日壹分銀六匁の通用に明日を相成候取沙汰に而市中之騒動夥し諸商ひ相止候に至る

○廿一日 くもり 永田義次郎來る

太郎當番

○廿二日 くもり又雨今曉雷○宗伯來る同人云唐厚朴のある山兵火に而燒今は厚き皮のよき厚朴なしあれは明代のもの也と

○廿三日 雨七十六度冷氣也○市三郎方へ雜用一兩遣す○同人之事幸三郎方の申遣ス

○廿四日 東北大風雨所々損所多し

唐厚朴

○廿五日 晴辰刻六十八度○石川獻藏來る

○廿六日 晴辰刻七十三度○花やしきの主半仙の存附にて八丈島へ龍眼樹をうへたるにみのりたり同人死したれば手向に龍眼肉一ツ遣すとてうたよみて遣す文長しこゝに不記○内藤幸三郎來る

○廿七日 雨 安富翁來る初見兒孫弓之師故酒肴出之

○廿八日 くもり風 市三郎事に付内藤へ申遣す旨有

○廿九日 くもり 内藤幸三郎井上信濃守來る市三郎事申談評決○羽倉外記來る菊間へ金二兩可相渡旨に而受取○大越貞五郎來る信濃守幸三郎貞五郎には酒肴差出す

○八月朔日 晴 富塚順作石川獻藏來る

○二日 くもり○昨日を太郎はくらし方爲任候○持病にて起臥常とこと也

○三日 雨 菊間來る羽倉の之金貳兩渡し遣す同人方の其旨可申立旨をも申聞遣す

○四日 雨 富塚順作來る

○五日 雨 又くもり ○井上内藤より市三郎事に付書狀來る

○六日 雨 六十八度之候也 ○内藤幸三郎原田六三郎方へ參る

○七日 雨 内藤幸三郎來る市三郎之事申遣す同事同人を以信濃守方に申遣す ○新家繼母禮后院一周忌備物としてきた物遣すこれは隠居はかりより也

○八日 晴 八十四度の暑にすゝむ ○來人なし ○俊藏を以信濃守を市三郎取計同意之旨申來る ○昨日松平肥後守を隠居へ菓子くれ候右之菓子は紀州に遣し候

○九日 晴 又くもり 暑昨日に同じ ○法橋一乘來る ○太郎 御靈屋を阿部良徳院殿に募參

英攻清

○十日 くもり ○大津來る療治

○十一日 くもり 冷氣也 ○内藤へ市三郎事に付及交通候 ○蝦夷へ鹿皮之事申遣す

○十二日 晴 ○昨日石川獻藏來る ○英人清朝を攻北京の都を攻落し天子韃靼に走候との風聞 ○京都笹屋太郎兵衛大坂麴屋源兵衛を書狀來る由家來申聞候る品物出之

○十三日 くもり 辰六十四度之冷氣也 ○富岡順作來る

○十四日 くもり 敬次郎講武所劍術の門入 ○太郎森山太吉郎不快見舞に參る同人話英夷富士の登山之節殊之外快晴穩なりしと也當月也 ○英清

英夷登富士
英清和

戰爭清砲臺を二ヶ所被破候る和議に成候由也

○十五日 晴 市三郎來る大久保并内藤井上并自分方も心得違之わひ也

○十六日 くもり 市三郎事に付原田六三郎鈴木四郎に見合方内藤に申遣す

○十七日 晴 忠四郎方の書狀出す○腫氣藥方赤大豆壹合茅根車前子各
 二匁麻袋ニ入赤大豆ト同し煮赤豆熟スル時麻袋ヲ去食用宗伯ヨリノ傳也
 ○久保田次部右衛門來る○横濱へ書狀出す
 ○十八日 晴辰六十六度○妻又姪淺井健次郎悴之よめ吉川氏昨日産に
 相果候由○松村良右衛門來る○窪田へ肴并酒遣す
 ○十九日 晴○市三郎來る信濃守幸三郎來る
 ○廿日 雨○宗伯來る
 ○廿一日 雨○大越貞五郎來る
 ○廿二日 晴風○久保田次部右衛門根津金次郎來る辰刻六十度鴈初來
 る地震兩度
 ○廿三日 晴 久保田次部右衛門來る○羽倉外記市川弁吉内藤幸三郎同
 豊太郎來る外記へは食事差出之
 ○廿四日 晴 久保田次部右衛門敷山得次郎來る

○廿五日 晴 石川獻藏來る○高橋小太夫殿御事觀月院殿三十三回忌に
 付古太夫殿の香典遣す其ふみの末へ
 山のはになこりのこしてくもりなく入にし月のかけしのふかな
 朝夕にうけしめくみを忍はれてとし經ても猶ぬるゝそてかな
 おく露をこゝろはかりのたむけ草野分のあとのいろはあらねと
 ○廿六日 晴辰刻五十六度也○昨日淺田宗伯來る同人話に水府老公本月
 十五日に月よしとて御奥に被爲入御嫌嫌能月を御覽御側の人々へ被下も
 のなと被遊候る夜半に御表へ被爲入候節御廊下に而厠に被爲入候後外に
 御歩行之處御胸痛に而御步行不相成かたはらに有之候ふみ段へ御こしを
 被爲懸候る胸を兩之御手に而御押候まゝ御差重りと之風聞尤元來御腫氣
 と御胸痛之氣味有之針治にて御開有之候御事之由然ル處當月七日御簾中
 へ御物語にはいかなるわけかわれ此ほと心物さひしきといふかことくい
 かなる大切之病を引出すへきもしらすされと表のものなと申候は、騒

敷かるへく又さしてかくと云病痛はなしそこ限に聞置給へと之御意也さ
れともとよりうち置へきにあらす密に江戸へ被仰遣候る熱田雄庵と申醫
師を被召同人十六日に立出したるにはやかくの如しとてかしこのものい
たくなしむ事之由老公死前を御察し御平日之御別段もよく相分ルと物
語る

○廿七日 曇り味爽雨 森山多吉郎來る

○廿八日 風夜風雨 猿若町出火延焼數町也芝居中にて人多く死したり
と云也原田其外に見舞遣す

○廿九日 晴又曇り夜雨 内藤幸三郎大越貞五郎市川弁吉來る

○九月朔日 快晴○今日太郎敬次郎安富弓之目稽古初る

○二日 快晴辰刻五十六度○上田菊間來る原田市三郎源藏齊藤來る○市三
郎は食事いたし歸る○大津音次郎來る折枝○大工伊三郎へ壹尺八寸五分

廿八日 景山公御病
死鳴物五日
普請不苦旨
觸來る

伊三郎へ脇
差遣す
音次郎療治

之中心にいなりの梵字有宮部某帶といふ金銘之脇差遣すこれはかれ別段
よくつとめ候故也

○三日 晴 俊藏來る○伊三郎のさかなくる、○原田市三郎來る太郎當

番

○四日 雨

○五日 曇り 來人なし

○六日 晴 富つか順作來る大坂のかひ物たのみ遣す○久保田次部右衛

門内藤幸三郎來る

○七日 曇り 來人なし

○八日 雨○市三郎來る敷山得次郎同斷○大越幾之進不出來之由貞五郎
を申來るに付おさと夕方を參る

○九日 午後を晴に成○おさとを幾之進不快難見捨旨に而看病之義申來
る○石川獻藏來る

大越幾之進
病死

○十日 くもり 今卯刻大越隠居幾之進病死之旨爲知來る○おさと夜に入歸宅

○十一日 くもり又晴 井上信濃守來る

○十二日 くもり 富塚順作來る○昨日高村俊藏へ申付候る原田市三郎

知行所の書狀出す内藤幸三郎來る 十二日 くもり 高山隼之助來る

○十三日 くもり 太郎當番 菊間來る詩三冊借用

○十四日 晴 前田夏かけ蝦夷調に付時服被下候吹聴に來る市川弁吉來

る兼常の大小貸遣す永田義次郎來る

○十五日 雨 人不來大越より七日逮夜の料理來る

○十六日 曉風 大越菩提所の使者差出ヌ宅佛前は三百疋寺のは銀二匁

香典相備申候

○十七日 くもり夕雨 齋藤源藏來る高村俊藏同斷

○十八日 くもり又雨 太郎勢子ならしに出る○夏かけへ歌直しに遣す

夏時服被
下

返書來る

○十九日 くもり 太郎久世出雲殿に參る

○廿日 小雨 内藤幸三郎來る

○廿一日 くもり 久保田次部右衛門敷山徳次郎來る兩人共飯を出す徳

次郎のは學韻貳冊貸遣す○風邪に付平臥

○廿二日 晴風 高山來る屋敷替之義申聞る太郎を以井上信濃へ申遣す

存寄無之と之事也是は市三郎屋敷也

○廿三日 晴 高山隼之介菊間來る

○廿四日 晴風 内藤幸三郎井上信濃守來る

○廿五日 晴 富塚順作來る知行所之引方願書差出

○廿六日 内藤幸三郎原田市三郎富塚順作敷山篤次郎來る○知行所之も

のの及利害書面下ケ遣す

○廿七日 晴 松岡千次郎來る○河内忠右衛門へ刀貳本下ケ遣す兼元重

アメリカ
御使歸府

國太郎勢子平均に付出る

○廿八日 晴 久保田次部右衛門内藤幸三郎來る食事差出す○アメリカ
へ使節被 仰付候新見豊前守航海無滯昨日内着之旨奉札來る

○廿九日 くもり 原田市三郎來る

○晦日 雨 永田より養女并孫共來る逗留也

○十月朔日 雨 井上信濃守來る

○二日 晴 原田市三郎來る前田夏かけ富塚順作來る

○三日 晴風○市三郎を書面來る返書遣す其旨信濃守方に申遣し候

○四日 晴 根津肇來る淺野の縁組申聞る

音次郎療治
市三郎逗留

○五日 ハレ 内藤幸三郎原田市三郎來る市三郎は今日を逗留大津音次
郎來る療治

○六日 晴暖氣也 高村俊藏來るこれは太郎縁組等之事申遣候を信濃守

海國圖志

相談也

○七日 晴 久保田次部右衛門來る

○八日 くもり 内藤幸三郎高村俊藏來る○書肆須原や伊八を海國圖志
一帙差出跡は追々差出候由

○九日 雨 石川獻藏永田義次郎來る

○十日 雨 高橋良三郎來る

○十一日 くもり過暖 高村俊藏來る

○十二日 雨 高山隼之助來る

○十三日 晴西風 内藤豊太郎來るおさと持病にて臥す

○十四日 くもり午時四十二度 北條松之丞來る

○十五日 晴 富塚順作齋藤源藏來る

○十六日 晴風 富塚順作并根津金次郎名代として長峯龍三郎來る金次
郎は海軍教授方に相成候由之吹聽也

- 十七日 くもり
- 十八日 荆妻井上信濃守方に參る内藤幸三郎來る
- 十九日 雨 上田直之進來る高橋兵作長崎を歸る大黃二斤を贈る唐帚并目鏡を前田小一郎吳申候
- 廿日 晴 敷山得二郎來る
- 廿一日 晴 高村俊藏齋藤源藏來る
- 廿二日 雨 長峯龍三郎來劍術にて講武所にて銀七枚拜領と之吹聴也
- 清人歸化之書面一覽玄琳持參也
- 廿三日 くもり 太郎當番○石川獻藏來る
- 廿四日 朝晴夕くもり 桑原老尼來る
- 廿五日 晴風 豐太郎并鷺香院來る
- 廿六日 晴 福島繁藏來るアメリカを歸來候間元家來に付逢遣し候
- 廿七日 晴 内藤幸三郎同豐太郎來る

過雷
暖電

- 廿八日 巳時雷且電風雨午後晴 市川弁吉來る
- 廿九日 晴五ツ時四十八度也昨日六十四度迄に成
- 十一月朔日 雨 來人なし○夕かたを井上信濃守高山隼之介來る
- 二日 晴 根津金之介畑山角太郎來る
- 三日 晴 來人なし
- 四日 晴 大槻俊齋種痘館引受被仰付候禮として來る
- 五日 晴 來人なし
- 六日 晴 齋藤源藏來る
- 七日 晴 富塚順作來る
- 八日 晴 長峯龍三郎來る
- 九日 晴 御本丸御造營御出來今日御引移之由也○高村俊藏呼寄候而市三郎知行所之義申談書狀遣す

- 十日 くもり ○市三郎知行所之初納三十八兩爲替大丸を受取
- 十一日 昨日幸三郎来る市三郎取計方申聞る ○はたけ山梅三郎来る
- 十二日 石川獻藏来る ○中村出羽守来る菓子并八丈縞壹反くる ○高橋平作を大黃其外くれ候挨拶に菓子一折遣之
- 十三日 晴 荆妻内藤幸三郎方の参る
- 十四日 晴 窪田治部右衛門来る
- 十五日 雪 内藤豊太郎来る
- 十六日 晴 菊間来るかくらく鴈をくる
- 十七日 晴 高山隼之助来る
- 十八日 晴 箕作阮甫を書物来る ○富塚順作来る松村良右衛門同断
- 十九日 晴 淺田宗伯羽倉外記来る 同人は金三百五十兩預ケ参る書付遣す
- 廿日 久保田治部右衛門来る雞をくる

- 廿一日 晴 大越貞五郎備中國檢地御用被仰付候を御暇拜領物之吹聴として来る肴代二百疋くれ候
- 廿二日 晴 荆妻大越の参る三十度之寒
- 廿三日 晴 荆妻大越へ滞留
- 廿四日 晴 家來等寒中として参る
- 廿五日 晴 同断
- 廿六日 晴夕を雪 高山の孫三才のいはひに付妻并兒孫共参る
- 廿七日 くもり 井上を金五十兩借用内藤を爲持遣す受取書来る
- 廿八日 くもり 中村出羽守の一昨日寒中之挨拶遣す前田夏かけの寒中遣す
- 廿九日 くもり 久保田次部右衛門内藤幸三郎其外来る
- 晦日 晴 大久保喜右衛門来る

- 十二月朔日 くもり 高橋平作を使者來る目かね代金三分壹朱遣す
- 二日 微雪 羽倉外記之書面金藏持參也存意口上にて申遣す○根津金次郎海船之御褒美頂戴之吹聴として來る
- 三日 晴 田村與助に爲持候而羽倉外記頼之金三百五十兩くら宿に爲持遣す相澤金藏立會として參る外記に遣し置候書付取もとし候事所々の寒中來ル○昨夜地震二度
- 四日 晴 淺田宗伯其外寒中見舞の人々來る
- 五日 晴 寒中人々來る
- 六日 晴 來人なし
- 七日 晴 羽倉外記前田夏かけ富塚順作高村俊藏其外來る
- 八日 晴風 横山庄三郎來る去ル四日アメリカコンシユルにて蘭人ヒユスケン麻布善福寺を歸り懸赤羽に而闇打に逢候由
- 九日 雪 市川弁吉世話にて金十九兩に而鮫貳本拂遣す

アメリカ
コンシユル被
殺

- 十日 晴 來人なし
- 十一日 晴二十四度之寒 富塚順作永田義次郎來る
- 十一日 朝雪午前を晴 太郎を久保田に遣す富塚順作來る
- 十二日 晴 來人なし
- 十三日 晴 大越貞五郎來る同人近々備中國玉嶋に檢地御用として參候間酒差出す犬飼庄藏來る
- 十四日 晴 昨日箱森村を年貢拂代金差出○喜三郎に金二十五兩返金
- 十五日 晴 富塚順作來る
- 十六日 晴 菊間來る高村俊藏同斷
- 十七日 微雪 敷山得次郎來る
- 十八日 雪 來人なし
- 十九日 くもり 井上信濃守來るかな川を書狀來る
- 廿日 雨 石川獻藏來る蝦夷を書狀來る

- 廿一日 晴又曇 中村千次并豊太郎來る太郎誕生故人々に食事爲致候
- 廿二日 晴 箕作阮甫村松良右衛門來る
- 廿三日 晴 内藤幸三郎久保田次部右衛門土屋大膳亮來る
- 廿四日 晴 畠山角太郎來る
- 廿五日 晴 大坂惣年寄町代共山本新十郎内藤幸三郎豊太郎石川獻藏來る○もちつき也
- 廿六日 雪 來人なし○太郎實母之不快見舞に參る
- 廿七日 曇り 横山鐘三郎來る
- 廿八日 曇午後南風六十三度之過暖 吉田四郎兵衛來る在所之山鳥をくるゝうつり京扇遣す
- 廿九日 曇り曉六十三度之過暖○高村俊藏富塚順作高山隼之介内藤豊太郎來る
- 晦日 雨四十八度之暖氣刻辰



坂六 石三 上一半 原百 粒一半 二相二二八 古一今一六五三 古
 四今七〇三二 正四今二、三 貳角七三 白角四十 黄二一 又十三
 厂〇〇〇〇七〇〇〇四〇〇四〇半

萬延二年正月元日 晴 太郎例之通登 城

- 二日 晴
- 三日 雪
- 四日 曇り
- 五日 晴
- 六日 大坂ならの町年寄共町代來る酒めし遣し候
- 七日 曇り 爲替百貳十兩市三郎知行所來る
- 八日 雨 羽倉より書狀來る委細菊間并金藏に申遣す
- 九日 曇り

- 十日 晴風 夜に入金助町出火延焼數十軒
- 十一日 晴風 具足いはひ有之候原田市三郎内藤豊太郎來る
- 十二日 晴風
- 十三日 晴 土屋大膳亮其外來る
- 十四日 晴 久保田次部右衛門來る昨日善國寺谷榊原既出火所々々見舞のもの來る
- 十五日 晴 次部右衛門方稽古初に付貳孫參る敬次郎は躰術之門入也
- 十六日 雨 川路新吉郎初之誕生日に付家來共酒爲給候
- 十七日 午後晴 内藤幸三郎來る
- 十八日 くもり夜雪
- 十九日 晴 新家鏡作書狀出す昨日大津音次郎來る折枝
- 廿日 晴 井上來る
- 廿一日 雨 安富弓術始二孫參る

大津ノ一

祝砲

- 廿二日 くもり 大越徳次郎來る○昨日大砲の音頻也英佛二夷人の會再宿寺へ歸たる祝砲のよし御臺場にて有よし篤次郎話也
- 廿三日 くもり微雨 酒井稽古初二孫參る
- 廿四日 雨 太郎當直○品川宿出火
- 廿五日 町々にて此節何町自身番といふのほり町ことに立
- 廿六日 昨日知行所村々之もの共年始也○富塚順作來る
- 廿七日 くもり 富塚順作をたのみ候而川村對馬守方遣す
- 廿八日 くもり 知行所名主共自詠之詩歌遣す貸下ケ金等夫々證文取之候由
- 廿九日 晴風
- 二月朔日 晴のとかなる日也
- 二日 晴のとか成

- 三日 晴 桂城恒庵來る松岡千次同斷
- 四日 晴 富塚順作來る○鏡作のサケ其外差越ス
- 五日 雪 太郎當直
- 六日 くもり 内藤父子來る
- 七日 晴曉雷雨
- 八日 くもり
- 九日 雨
- 十日 くもり 新吉郎原田に參る
- 十一日 晴 水戸浪人御國に及亂妨候に付水戸に御召捕之積右に付江戸大川渡船場とまり川々の御固メ出來松平肥後守松平下總守松平越中守酒井勘解由酒井左衛門尉小笠原信濃守非常之節人數出候之御達有之候旨高村俊藏物語る
- 十二日 くもり 本願寺地中願行寺と申候僧來る面會これは田口五郎

水戸浪人御召捕

左衛門也

- 十三日 晴 高村俊藏金藏來る○金子之義羽くら申來る
- 十四日 内藤幸三郎來る
- 十五日 肇家内來る

太郎臨時上覽

○十六日 晴 昨十五日太郎當番吹上廻り之順に同所は 御成に付罷出候處俄に弓之上 覽有之大的二本皆中再ひ又大的被 仰付候處殊之外弓強候無中御扇子御書被下之御書は日の出松にすゝめの圖也○水戸殿に百石取の士浪人いたし岡部三太郎事不道也久助と名乗水茶屋の株を二軒相求妾を差置三月三日之掃部頭殿は狼藉之主謀之ものに場所にも出おくし候無逃去候跡に上京いたし九條殿を可殺といたし候得共同類にて上京いたし候鏡之助と申候もの被召捕候に付江戸へ歸候をいろく取計諸侯かたらひ候無横濱は可及狼藉と巧居候處去ル十二日吉原に被召捕池田播磨守懸りに吟味之上御目付黒川左仲立合中川修理太夫の

水戸浪人岡部三太郎

御預吟味之節激烈なること申立候由之風聞高村俊藏方申來候召捕候同心は小村藤太郎と申候御金藏之盜賊をも召捕候もの也

水浪人

○十七日 雨 此節水府浪人府中在牛窪村玉造村潮來邊立廻り居候由全浪人名前相知候もの共凡四十五六人郷士并神主修驗之類八九百人右之場所最寄へ四十人位ッ、人數相集候得共いまた手出しはいたし不申候由○長棒駕籠貳挺騎馬十二三人小筒銃炮持候もの十人ッ、五組大筒貳車雜兵人數不相分小筒持候もの駕籠の前後を固メ水戸前中納言殿軍用金と申職を立通行いたし候を粕壁宿百姓大吉と申もの小金原にて見受歸候由鳥手宿に八州廻り三人手先十人計召連居候を浪人八九人立入面會所持之大小衣類借受立去候由右は名主宅に晝九ツ時頃之由

○十八日 晴 高村俊藏來る

○十九日 晴 田村與助娘七夜に付同人を酒肴くる、○長田よし次郎來る

○廿日 くもる 次女のふ來る

○廿一日 くもり 坐光寺金次郎來る

○廿二日 雨 次男敬來る

○廿三日 風雨 ハルリス登 城に付太郎罷出る

○廿四日 晴 内藤幸三郎伴豊太郎縁組内引取今井氏名くに

○廿五日 晴

○廿六日 樂水院様七回御忌御法事に付今日親屬共相集候佛事いたす

○廿七日 くもり ○太郎并家内一同樂水院様御墓所に參詣

○廿八日 くもり又雨 敷山千次郎來る

○廿九日 くもり 石川獻藏來る ○夏かけへうた相談に遣す

○晦日 雨

○三月朔日 曇

○二日 くもり夕雨
 ○三日 風雨
 ○四日 晴夕かた雷雨雹けしき也
 ○五日 晴 太郎當直○昨夜侍へヤへ盗入たるけしき也
 ○六日 くもり 醫學館向々出火延焼少々有之候由也
 ○七日 くもり 井上信濃守來る四ツ谷出火
 ○八日 雨 松岡千次郎來る
 ○九日 晴 敷山得次郎來る
 ○十日 晴 今曉松平大學頭自火に消失○四ツ谷邊出火地震
 ○十一日 くもり 田かくやきて人々にたうへさせける
 ○十二日 晴 夜雨電光甚し 順作來る喜三郎之書面差出す
 ○十三日 くもり 荆釵高山に參る○昨日石川宗五郎御軍艦所組頭被
 仰付候吹聴として參る○石川獻藏來る

水浪

○十四日 くもり 内藤豊太郎來る
 ○十五日 くもり 太郎當番敷山徳次郎來る○水戸浪人共之巨魁十一人
 は御在所三人は江戸御屋形に自訴いたし候外に願筋等は無之亡君之思
 召を繼候而夷狄之ため死を極候而相集候處 公邊之御沙汰且當君之御難
 義等に相成候而は恐入候間自訴之もの共いか様なる御仕置にも被 仰付
 候而追々相集候もの之御容恕相願候由申立候由水戸浪人と申候而金子か
 り歩行候ものは所々之溢物之由今日淺田宗伯參候而咄也
 ○十七日 大雨又雷夕晴○上田菊間來る
 ○十六日 くもり夕雨 山本九十郎來る淺野中書之親類書外書付壹通差
 越す
 ○十八日 晴 久保田千太郎金川に罷越候爲暇乞來る
 ○十九日 晴風 千太郎出立に付敬次郎爲代兼參る
 ○廿日 雨 大工喜三郎金十五兩并冥加金三兩上納

- 廿一日 くもり夜雨 内藤豊太郎妻今井庄五郎初初來る幸三郎妻同道也
- 松村良右衛門忤健之丞元服いたし候而來るわた井扇子遣す原田敬策妻小兒召連來る高山隼之介來る岡田備後守來る酒差出す
- 廿二日 くもり 内藤幸三郎桂城恒庵來る
- 廿三日 快晴 御能出人に而太郎登 城町入御能也御造營御引移之御いはひなり
- 廿四日 晴 おさと紀州森田へハ泊かけに參る
- 廿五日 晴 おさと紀州表仕もり田之部屋を歸る同人はおさとの姪也
- 廿六日 晴 妻妹大越氏來る井上の妻來る
- 廿七日 晴 石川獻藏并富塚順作家内來る
- 廿八日 晴 市川弁吉來る
- 廿九日 晴 内藤豊太郎來る○井上之頼にて詩一首歌一首しるし遣す
- 晦日 晴 高橋古太夫殿被參候酒肴奉る窪田治部右衛門來る

廣瀬淡窓の狐の外

○四月朔日 晴 高村俊藏富塚順作齋藤源藏來る俊藏之松魚をくる○
 荆妻信濃守方の年始に參る
 ○二日 くもり 俊藏娘土屋賢也妻之來る高橋良三郎來る同人中城村之醫元脩養子尙綱と申候ものハ廣瀬求馬か塾之參りたる狐を塾生共打殺したるに右之尙綱へ狐とり附て口走たる趣を淡窓養子半次自筆に而認たるをみせたり其内に全躰我に二子有兄を普諦といひ弟を仁と云皆塾に近付キ講釋會讀等を聽聞いたし且字紙の地に落居候を拾ひ取熟讀いたし候に付今はいつれも博學に成たり尤弟仁之方は文才も有之晩學ながら我等も少々は讀書出來候と申て數十字をたれとも尙綱筆意には少も不似云々其日之翌日立去たるよし辛亥九月九日と有て其前年四月のこと也淡窓等偽の書面を可出ものにあらず西洋學者は狐附なしと云故にこハに記す狐を遣ひ候修驗者其外を多く吟味したるに土屋相模守懸り武州村名失念橘

樹郡の修驗明達院義榮と云ものは狐の附かた其外まで詳にいひて幼年者
柔弱者病後等のものへはつけらるゝよしをいひたり人に狐につくへきわ
けなしとまでに詰問したれともかれを詳にいひて其狐は武州子母郷村蓮
乗院といふものを貰ひたるよしをいひたり其蓮乗院は内藤豊前守懸りに
る怪敷奇禱いたし候故を以被召捕吟味中病死也久須美六郎左衛門懸り也
天狗に擡はれて二日之内に江戸を石州迄参りたるは龜井隱岐守を寺社奉
行に取計方問合有之候を答したり我かゝり也狐取附て狐遣ひを相手取て
奉行所吟味に成たるは御勘定奉行曾我豊後守懸りに土屋鍊四郎奉行也
以上は御用向に取扱たるうちたしかなるを記す其外いくらも有これは
蘭學者は決りなしといふ故に詳に記す也

- 三日 辰刻を雨 今曉七ツ時前四谷御門外を出火市ヶ谷尾張殿御長屋
よほと焼失にて鎮火
○四日 くもり風

- 五日 くもり又雨 石川獻藏來る安積長齋先生葬式に付敬次郎來る菩
提所深川妙源寺也法号安祥院殿積翁日祐居士
○六日 くもり夕晴
○七日 くもり微雨 富塚順作來る山内八郎之義相談有之及斷候○はし
めて牡鷓を聞
○八日 快晴 小樽を繁藏を以長崎の留帳かりに來る菊池大助を取寄遣
す
○九日 晴 恩田友之助來る步行願いたし候方歟之由申之忝旨及挨拶此
屋敷へ來候時棺に入候を闕を越候積と覺悟いたし置たれば望もなしされ
共人は深切故厚謝し遣し候
○十日 くもり 太郎遠藤但馬守殿御差圖より吹上り罷出る六時過歸來
る刀術野仕合御番方 上覽之由數十人打こみにて打合候を面々に附たる
まりを被落候ものはまけの之由也はしめに勝候もの羅紗のきれ其次扇其

次はなし四十以上は一度若き人々は度々太郎は御好みともに八度出申候二度勝候得共三度目々末に付被下物なし御にし御菓子赤飯鮎之御料理等結構なる事也御みつかから御世話被爲在候る乍 恐被爲行届候御けしきあれ川路は負たるそなどの 御聲被伺たるよし也

○十一日 晴 前田夏かけ来る

○十二日 晴くもり 溝口八十五郎長崎に立其父の贈りたる松の小柄を遣すとて

歸るさをまつのしるしに東なる昔のこともおもひ出てよ

高山母并隼之介来る

○十三日 くもり○新吉郎吐甚し浅田宗伯来る桂城恒庵来る貞五郎御用

先書状来る

○十四日 くもり○新吉郎少々快

○十五日 雨 井上信濃守浅田宗伯来る太郎當番

○十六日 晴 中村千次来る

○十七日 くもり又微雨 夏かけ方は日本政記遣す

○十八日 雨 來人なし

○十九日 晴 石川獻藏齋藤源藏来る○寄合浅野備前守娘を太郎妻に賞受度旨申遣候處承知之挨拶来る則兩敬爲取替續書爲取替候元來彼方々強而申込故也媒人は山本九十郎也同人を今日呼候る酒差出申候○敬次郎内藤幸三郎方に元服いたさせ候名は敬徳字有邦と号し幼名敬次郎を謹吾と改候

○廿日 雨 浅野備前自書にて看来る

○廿一日 晴 松村順右衛門妻来る

○廿二日 くもり 良右衛門妻歸る

○廿三日 くもり又雨 土屋金六郎来る俊藏妻来る○もと下女縫来る米

五升遣す同人之夫病氣によりて也

- 廿四日 くもり 石川獻藏來る刀三本みする朝右衛門に遺すみなわろしと云來る
- 廿五日 雨 自分誕生に付人々に酒給させ候
- 廿六日 くもり 高山來る
- 廿七日 くもり 松村健之丞來る○大工伊三郎沽券之事を云斷遣す
- 廿八日 雨 高村俊藏來る○大工喜三郎へ沽券狀貸遣す證文取之
- 廿九日 くもり 大工の用立候百四十五兩返金證文取之五十兩貸遣す
- 五月朔日 くもり又雨
- 二日 雨午後晴 石川獻藏來る○謹吾實母方の參る○野田源太夫を使來る○淺野備前守方の魚を遣し候自書來る
- 二日 雨 來人なし
- 三日 晴 石川獻藏來る

- 四日 くもり 貞五郎之日記來る
- 五日 雨 風邪に平臥富塚順作犬飼庄藏來る
- 六日 くもり 井上信濃守淺田宗伯來る海國圖志二冊宗伯へ貸遣す
- 七日 くもり夜雨 内山彦次郎來る土産くる、松村良右衛門來る
- 八日 くもり 末子新吉郎牛痘に遣す○太郎宗伯方の參り怪我いたし候名くらに參る怪我は落馬也○昨七日大津音次郎之療治受候○夏かけ短尺來る
- 九日 くもり 内藤幸三郎來る
- 十日 くもり 坂上丈助來る
- 十一日 晴八ツ時八十九度に成○小林金藏來る○高俊藏村脱カを豐嶋丁貳丁目彦兵衛店和助方の天怪出候義に付當四月町役人共之届書寫差越大意は老婆のこときもの其外半躰なるもの等種々之姿を現し或は火之玉のこときもの出候由等也

- 十二日 晴 北條平次郎妻來る富塚順作參る竹の子をくる、
- 十三日 晴 石川獻藏來る
- 十四日 晴未々雷氣微雨○荆妻大越に佛事ありて參る○稚子新吉郎植痘のうみ返しに參る
- 十五日 雨 荆婦大越より歸る
- 十六日 晴 風邪平臥
- 十七日 くもり
- 十八日 くもり 高山隼之介久保田次部右衛門來る
- 十九日 くもり 柏もちくはり
- 廿日 くもり 高橋美作守土岐虎之介來る虎之介は佐州を歸候る土産をくる、同人は佐州の圖二卷貸遣す御勘定奉行小笠原長門守は京都供立之一件帳かし遣す
- 廿一日 くもり 來人なし

- 廿二日 くもり風 明珍宗保は申付候筒出來候る來る鏝も來る
- 廿二日 くもり 來人なし
- 廿三日 くもり又晴九十度○夏かけへ歌相談として遣し直し即刻來る
- 石川獻藏へ鏝たのみ遣す○兼元の刀淺右衛門は遣すよからぬよし申來る○今日末子牛痘十五日め也みなあせて過半かさふた落たり右之いはひに乳母へ金貳朱遣す
- 廿四日 くもり 齋藤源藏來る
- 廿五日 くもり夕晴彗星出る凡亥子の間也己午之間をさして光芒數丈也○石川獻藏方は菓子遣し刀返却○土岐虎之助へ小兒へ單衣鯉節十本添遣す
- 廿五日 くもり 齋藤源藏富塚順作來る
- 廿六日 くもり夜雨 井上信濃守來る
- 廿七日 くもり 高村俊藏富塚順作來る

東漸寺之盜

○廿八日 晴 松村良右衛門富塚順作來る
 ○廿九日 晴 ○昨夜品川東漸寺イキリス人旅宿へ何ものにか廿人はかり切こみ候而及騒動候由日本人警固之もの相防候而壹人を召捕貳人を切殺候而尤怪我人も有之候由賊はいつ方の歟逃去候由也右に付下町邊は白晝に木戸を打候而改候由昨夜火附盜賊改は出雲之守殿が御内々御手當之義被仰遣候而盜賊改組之もの召連候而出張之由しかし間に合不申候由
 ○卅日 晴 今日水泳にての話狼藉死人即死四人半死壹人警固之人大手負江端橋平手負天野岩太郎河野虎吉柘植鏡吉北條董次郎中尾祐太郎今井善十正木松二郎異人別當二人

○六月朔日 晴 來人なし
 ○二日 くもり昨夜の雨折々○五月廿八日之夕水戸浪人共兩國の船を出し密に大森へ上候而東漸寺に切込候由惣人數十八人内召捕一人即死二人

同断

四人品川に切腹のこり十一人行衛不知候由外國方御用出役詰合之もの手負七人翌朝深手にて死候もの壹人松平時之助家來手負三人イキリス屍之もの^{日本人}即死 壹士官貳人下官貳人いつれも淺疵受候由之風聞也
 ○三日 晴九十九度之暑也 石川獻藏來る錨出來雪かた歌埋もる、身をおもはす君を思ふこゝろそふかさの、白雪
 ○四日 くもり七十七度之冷氣○山本新十郎内藤幸三郎來る
 ○五日 晴 會津の家來へたにさくかけやる
 ○六日 晴九十三度之暑也
 ○七日 晴九十三度之暑也○石川獻藏が鮎をくれる○蝦夷新家之文通來る
 ○八日 晴九十三度 市川弁吉來る
 ○同日 九十五度之暑に成夕雷雨高田雷火雷落ること數所
 ○九日 くもり七十六度之暑に成 秀三郎來る

○十日 晴八十五度之微暑也妖星昨夜は光芒なきかことし今曉は更に不見候

○十一日 晴 永田義次郎永峯良三郎來る内藤幸三郎來る

○十二日 晴九十三度之暑 井上信濃守來る

○十三日 晴 前田夏かけ其外來る

○十四日 晴 暑中として木村董平其外人々來る

○十五日 曇り折々雨 暑中に人々來る

○十六日 曇り折々雨七十七度之冷氣 暑中に人々來る○昨十五日松

村忠四郎元養子當時山本新十郎次男山本左門病死之旨申來る

○十七日 朝くもる七十二度午後晴八十五度○井上より佛事之もち來る

養母十七回忌也○松村良右衛門が暑中にうなきくるゝ

○十八日 晴 暑中として人々來る○蝦夷へ書狀出す六月十六日記伊守

殿御渡御領内殘黨之もの共之義に付是迄寛大之御所置に相成居候處今以

兎角居合兼候趣に付今般嚴重に御手配有之悉御召捕に相成候様被 仰出候就_テは此上徒黨ケ間敷義相企候者有之におゐては御人數差向御領内に_テ御取鎮若不法之働有之候は、速に御討取可被成候若及御遲滯候節は御沙汰之品も可有之候間此段可被申上候事右之通水戸殿家老へ相達候間爲心得相達右の向々_ニ可被相達候事

○十九日 晴夕方八十六度に成 暑中として人々來る

○廿日 曇り又晴 暑中として人々來る○昨十九日井上養母之十七回

忌也

○廿一日 暑中見舞として石井能登守土屋大膳亮其外來る

○廿三日 晴 土屋鏡四郎其外暑中として來る

○廿三日 晴 土屋采女正が暑中として菓子來る○前田夏かけ羽くら外

記へ暑中見舞遣ス

○廿四日 曇り微雨風 來人暑中の人々而已

- 廿五日 晴 太郎が相願候自分歩行願之義遠藤但馬守殿御書取組頭が達し有之墓參并親類へ罷越候義可爲書面脱カ事右に付廻勤として太郎罷出る
- 石川獻藏來る○土屋大膳亮嫡子鏡四郎昨夜病死之旨申來る同人一昨日參ル大膳亮見舞旁太郎を遣したるに今日講武所へ歸候る四ツ半時頃相果候旨等承り驚入
- 廿六日 晴八十六度也○金藏參る春同斷いづれも暑中也○大膳亮方の葬式見立に人遣す
- 廿七日 晴 内藤幸三郎箕作阮甫來る
- 廿八日 晴 不快淺田宗伯來る
- 廿九日 今曉雨 井上信濃守來る
- 七月朔日 晴 富塚順作市川弁吉來る
- 二日 晴九十度○虎之御門内高木主水正屋敷出火に付太郎寄場へ出る

- 三日 晴 窪田次部右衛門來る
- 四日 暴雨 永峯龍三郎來る○池田岩之丞病死之報有五月十七日也と申也
- 五日 雨昨日の如し○お幸の夫明日豊後へ參候由に而爲暇乞參る
- 六日 晴又くもり昨日の如くにして雨少し 鈴木順藏
- 七日 晴くもり 太郎當番
- 八日 晴九十度 畑山角太郎來る○羽倉外記來る酒を出しみやけの返禮遣す
- 九日 晴 木村圖書引込たると之説有
- 十日 雨 敷村徳次郎來るうた一枚かし遣す
- 十一日 雨○上田角之丞來る
- 十二日 天氣昨日の如し 順作繁藏來る順作へは書料として三百疋遣す

- 十三日 昨日の如し 明珍が甲冑出來參る半分也存意申遣す○高橋美作守方の餞別遣す
- 十四日 くもり又雨 齋藤源藏來る岩瀬肥後去ル十一日曉相果候旨申聞る腫氣也
- 十五日 晴 内藤豐太郎來る
- 十六日 晴 富塚順作來る
- 十七日 晴夕七ツ半時八十七度の暑也○松岡千次郎淺田宗伯來る
- 十八日 晴 小一郎長崎へ二年參る暇乞に來る
- 十九日 晴 石川獻藏土岐虎之助來る
- 廿日 晴 土屋大膳亮市川弁吉川上圓藏高山隼之介來る
- 廿一日 井上信濃守來る
- 廿二日 晴 大貫廉平ならの町年寄來る
- 廿三日 晴 來人なし暑九十一度に成

- 廿四日 晴 來人なし内山彦次郎へほきうた遣す
- 廿五日 晴 ならの町^{年脱カ}寄清水浪次昨日來る
- 廿六日 晴 松岡千次郎來る
- 廿七日 晴 太郎當直○小林藤之助來る
- 廿八日 くもり微雨 上田直之進來る横山鐘三郎來る○去ル廿七日去年三月三日亂妨之面々死罪に被 仰付候由也
- 廿九日 晴昨日之雨故歟七十七度也○山内八郎來る
- 卅日 晴 齋藤源藏内藤豐太郎來る内藤御兩親之御書へ奥書いたす
- 八月朔日 晴 富塚順作淺田宗伯來る
- 二日 晴九十二度○來人なし
- 三日 晴 山本新十郎次男新葬後之墓參として代參遣す即學院也寺は日蓮宗谷中宗林寺也

- 四日 晴 來人なし
- 五日 晴 けふは木姓の人うけにいるよしにてわれも亦木姓也とて荆
釵心附にて酒肴有末子并下女共にも有
再ひと又あひかたきうけならし六十路にあまるとしにおもへは
- 六日 雨七十度に下る 來人なし
- 七日 くもり六十九度に成 新家に佛事有おつる孫一同參る高山老婆
來る
- 八日 晴 富塚順作來る
- 九日 夕雨 横山莊三郎來る
- 十日 雨 松村良右衛門來る外人賣物之兼定之刀渡し遣す
- 十一日 くもり 來人なし
- 十二日 微雨 御つた歸り申候良右衛門來る昨日之刀歸る
- 十三日 くもり 來人なし

- 十四日 市川丈助木村董平高山老母來る
- 十五日 くもり又雨月なし○松村忠四郎方之兼定之刀遣す○山本新十
郎之同人之兒之事申ものくれたる返事に
なき人を忍ふか露に袖ぬれてはれ間もみえぬもち月のかけ
若楓とくちりぬるををしまれてまた幾しくれを袖にかゝれる
うり遣すものなかりければなら製の倣唐墨へ
からならぬしるしはかりのかみかはりちと御うつりにならの墨かな
- 十六日 くもり 來人なし
- 十七日 雨 石川獻藏來る
- 十八日 晴又くもり
- 十九日 晴 黒坂丹助來る昔屋敷内を掘出したると云龍の彫物有四尺
八分之刀をみする奇刀也
- 廿日 くもり 井上信濃守内藤幸三郎來る

- 廿一日 晴南風八十六度にもとる 永峯良三郎來る
- 廿二日 市川弁吉土屋金六郎來る
- 廿三日 くもり 兼定之刀歸す○富塚順作來る
- 廿四日 くもり 高村俊藏來る
- 廿五日 くもり 松平力之助來る初也
- 廿六日 晴 岡田備後守來る吟味役被 仰付候吹聽也
- 廿七日 晴 太郎當直也○齋藤源藏石川獻藏來る同人を松たけをくる
- 廿八日 くもり 來人なし
- 廿九日 くもり 箕作阮甫へ中外新報八冊返却
- 九月朔日 晴 來人なし
- 二日 くもり 久保田次部右衛門來る○高山隼之介來るいつれも酒飯

差出す富塚順作同斷

- 三日 くもり 忠四郎方の狀を出す
- 四日 くもり 内藤幸三郎明珍壯輔堀口市太夫友野肩吾土屋大膳亮同人倅來る
- 五日 くもり 淺田宗伯倅來る○岡田備後守方の祝ひの肴遣す高山隼之助并同人母も來る
- 六日 くもり 來人なし
- 七日 くもり 今泉獻藏來る○立澤健之倅建左衛門簾をくる
- 八日 くもり又雨 淺田宗伯來る酒を出す○明珍宗保へ申付たる甲冑出來也漆を遣し鍔を遣し冑とこてすねあてを遣し候水牛角も遣し置候仕立并面ほそにて十七兩貳分かゝる
- 九日 雨 土屋金六千次來る
- 十日 雨 來人なし木村董平祝もち來る

日下部伊三
町田直五郎

- 十一日 雨 日下部伊三次妻并同人娘來る伊三次一向宗に付改葬之事
薩藩町田直五郎引受追お相談之積伊三次の跡は同人娘へめあはせ養子い
たし候由娘は當年廿才と申候
- 十二日 雨夕晴 來人なし
- 十三日 雨月なし 松平主税助來る
- 十四日 くもり 箕作阮甫土岐虎之助妻并娘富塚順作内藤幸三郎來る
いづれも酒食差出す阮甫は酒食なし
- 十五日 晴又くもり 富塚順作松平主税之助來る
- 十六日 雨 來人なし
- 十七日 快晴 大熊鏡之助來る
- 十八日 くもり ○三輪啓右衛門久保田次部右衛門松平主税助其外來る
- 十九日 雨 高村俊藏近々京都へ出立之由にて暇乞に來る
- 廿日 雨 松平主税助來る

- 廿一日 晴 上田直之進來る
- 廿二日 晴 井上信濃守吉田重助來る石川獻藏同斷松村賢之丞來るト
治をくる、井上松魚をくる、
- 廿三日 晴 淺田宗伯松岡千次來る小田又藏來る
- 廿四日 晴 松本三之丞來る
- 廿五日 晴 永田義次郎來る
- 廿六日 晴 來人なし
- 廿七日 午後雨上に同じ
- 廿八日 雨 來人なし三千本太郎當直茶番也
- 廿九日 晴 長峯良三郎來る○大越御用先々狀來る
- 晦日 雨 甲冑歩行いたし候おつまつき怪我いたす

- 十月朔日 くもり又晴 夏かけ菅家遺誠一冊來る佐渡役人堀田市太

夫來りいりこをくれ候

○二日 くもり 淺田宗伯桂城恒庵來る桂城は不沙汰尋也

○三日 快晴 松村健之丞來る

○四日 晴 高山隼之介來る

○五日 雨 山本新十郎來る

○六日 晴 昨夜嵐也石川獻藏來る

○七日 晴 のふ女來る土岐虎之助來る

○八日 晴 宣女歸る○昨日松平主税介來る

○九日 晴 來人なし

○十日 雨 來人なし

○十一日 晴夕くもり○刀拭兼元兼定直次大左

○十二日 晴 桑原左衛門尉○敬次郎乳母□□來る

○十三日 雨 來人なし

大直サリナハ
三所兼元
兼定

長直眞臣
重虎國
大五小
大氏小
大政兼房
小弘兼定
小定行

○十四日 雨 來人なし増上寺へ御參詣今日初る謹吾講武所さし矢之

修行に出候積之處右に付止

○十五日 晴 荆婦井上へ參る

○十六日 晴 齋藤源藏來る○兒新吉郎外出○昨日堀口一太夫來る土産

の干魚并緒三つくる、砂糖附之折一つ遣ヌ刀拭

○十七日 くもり○太郎淺野中書之抱屋敷に參る○富塚順作來る

○十八日 晴風○來人なし○太郎當直也

○十九日 晴 河野七太郎妻來る松平主税介來る

○廿日 晴 内藤豊太郎來る

○廿一日 晴 おさと高山隼之介方に參る○同人來る

○廿二日 くもり夕雨 宮崎清一郎來る

○廿三日 晴 内藤豊太郎高山權次郎

○廿四日 晴 宗伯來る刀拭

○廿五日 晴 四十度初氷る ○石川獻藏來る
 ○廿六日 晴 根津金次郎土屋金助來る 松村健之丞來る
 ○廿七日 晴 忠四郎が書狀到來良右衛門持參也 ○久保田治部右衛門御
 用召吹聽來る 太郎謹吾待受として參る ○昨日内藤幸三郎來る
 ○廿八日 晴 久保田次部右衛門昨日被仰渡之趣年來武邊之心懸厚く藝
 術格別宜仕候に付 御目見以上被 仰付田安殿奥被 仰付之同人吹聽と
 して來る ○日下部官之丞過日參候挨拶遣す
 ○廿九日 くもり夕雨 井上信濃守來る ○中村千次來る

太郎結納

○十一月朔日 雨 根津はしめ來る同人養子のはなし申之
 ○二日 晴 寄合淺野備前守二女名ははな太郎と縁組内談相整候に付今
 日結納遣す帶二筋松魚節一連昆布一臺万年酒ク口酒也二樽遣す太郎方
 挨拶の使者來る太郎より手のし遣す備前守三千五百石にて其本腹の娘不

釣合に付及斷候事再々應なれ共いか様にも祇役はいたし可申と之事米を
 敬齋つき候時の手傳位はいたし候哉と尋たるに必と申越故に井上信濃守
 を以再々應右等之事申談候承知に付取極候
 ○三日 晴 根津金次郎が長崎みやけにコツフ唐番をくる、○松平主税
 介來る

小正宗 兼大卷
 正真定 兼直勝
 兼貞 兼直勝
 忠國 兼直勝
 玉たすきの
 奇怪

○四日 晴 常嘉の目貫申付ル
 ○五日 晴 久保田の此度之喜ひとして龍門一反かつほふし遣す
 ○六日 朝くもり夕晴 高山隼之介横山庄三郎來る
 ○七日 晴 來人なし ○昨日拭刀 ○夜に入候横山庄三郎來る
 ○八日 晴 小石川戸崎町石屋長左衛門弟子丑之助文化十二年九月氷川
 社の祭禮とき奇怪有しこと伊三郎に問へし玉たすき五ノ四十六に詳也
 ○九日 雨 淺田宗伯來る
 ○十日 村しくれ也 來人なし ○舊友肥人澤村宮文悴収藏來るやりをく

眞淵學

- る、太郎にも乞て面會して歸れりこれは九日之事也
- 十一日 羽倉外記齋藤源藏來る
- 十二日 くもり又雨 來人なし眞淵之漢學の師は渡邊蒙庵といひて徂徠の弟子也清水濱臣眞淵か詩集また漢文をも數多もちたり玉たすき九之十二
- 十三日 朝雨午後晴 來人なし松平主税助に玉たすき其外數部合十五冊返却同人方をも川角太閤記其外返却也
- 十四日 くもり 來人なし
- 十五日 くもり 和宮様今日御着也板橋昨夜御泊也
- 十六日 くもり 昨日松平主税介來る
- 十七日 曇 來人なし
- 十八日 くもり 内藤幸三郎富塚順作松村健之丞堀口市太夫山本新十郎來る

十五日 大胤 兼同上
 直胤 兼同上
 宗次 兼同上
 筑信 國宗
 正恒 國宗
 忠吉 忠廣
 景山 公御作
 御刀

廿五日 刀拭
 大忠 小兼元
 左新 直江
 筑前 道永
 紋附 勝臣
 正次 兼則

- 十九日 雪又雨 來人なし
- 廿日 晴 來人なし
- 廿一日 晴又くもり冬至也
- 廿二日 雨夕晴 來人なし
- 廿三日 晴 宗伯よりうさきをくるゝくほたへ遣す
- 廿四日 晴 井上信濃守富塚順作來る
- 廿五日 晴 來人なし
- 廿六日 晴 内藤幸三郎同豊太郎上田直之進高橋次郎廣瀬範次石川獻藏來る
- 廿七日 晴 來人なし
- 廿八日 晴後雨又雪 來人なし
- 廿九日 晴 松平主税之介來る石川左近將監二十七回忌に付寺へ代香遣し宅へ備物いたす

○晦日 晴 來人なし

○十二月朔日 晴 石川獻藏松村健之丞來る

○二日 微雪風午後晴 來人なし

○三日 朝晴己よりくもり 煤拂手傳として富塚順作來る

○四日 晝くもり朝夕晴 松平主税之介來る書物借用

○五日 晴 松村良右衛門齋藤源藏來る○杉田彌平次より越後鮭來る

○六日 晴 大工伊三郎來る淺田宗伯來る

○七日 晴 寒中として來る人多し其内大久保喜左衛門 守井山本

九十郎は酒食差出○太郎廻勤

○八日 晴 寒中見舞に人々來る

○九日 晴 寒中見舞に人々來る松平主税介は中飯差出す前田夏かけ

翁は寒中見舞の肴くるゝ

○十日 晴 高山隼之介其外寒中に來る

○十一日 晴 五十六度之暖氣にて春のことし風なし

和宮様牛車に御本丸へ御引移也御留守居たて道具御目付二本道具にて御供之由御道筋みち造の上莖之上は砂を敷候御橋等眞ッ平ラに相成候由未聞之壯觀也

○十二日 晴 寒中見舞として人々來る桑原へは晝飯を出す

○十三日 晴 寒中として人々來る永田義次郎は食事出す

○十四日 晴 井上信濃守其外寒中に參る同人は酒を出す

○十五日 晴 寒中見舞として人々參る富塚順作大津音次郎は食事差出す

○十六日 晴 寒中見舞として人々來る

○十七日 晴 同上

○十八日 雨 もちつき也○來人なし

○正月十三日
大忠小廣
吉定忠元
康繼無銘



大眞直兼忠大
守次元吉左
小兼顯祐忠
光國定廣信

- 十九日 晴 來人なし
- 廿日 晴 井上信濃守持參之肴にて酒を出す○廣瀬範次來る詩をくる
墨一箇矢のね石遣す
- 廿一日 晴 來人なし
- 廿二日 晴 松村良右衛門來る
- 廿三日 晴 堀田市太夫淺田宗伯來る
- 廿四日 晴 來人なし刀拭
- 廿五日 晴 松平主税助畑山角太郎來る
- 廿六日 晴 窪田次部右衛門自作の短刀をくる、驚入たる出來也富塚
順作松村健之丞來る
- 廿七日 晴 森山多吉郎來る
- 廿八日 晴 石川獻藏來る
- 廿九日 晴 久保田次部右衛門同人忤千太郎かな川の調役並に被 召

元日
御城混雜

- 出候風聽てに來る石川獻藏支配勘定被 仰付候吹聽に來る○内藤幸三郎歳
暮に來る
- 晦日 井上信濃守歳暮に來る例之通うなきをくる、○石川獻藏方の烏
帽子并勝男節を遣すうたに
としともにもに彌あら玉を祝ひつゝ着初てのほれ位てふ山
烏帽子遣すことはしかきしたり
- 文久二年正月元日 大雪 年始來人なし
- 二日 晴 年賀として人々來る
- 三日 晴 同斷○元日御城混雜は雪故也御禮濟にても中之口其外退出
ならずよりて大目付駒井山城守御目付神保伯耆守裝束のまゝにて御玄關
前其外差圖いたし候而少々井キ出來溜詰退散之由それにても中之口井キ
不申候に付御玄關を刀を提候而風呂敷を持候而罷出候義をゆるされ候に

付御玄關カカツハなとにて歸候ものも有之候由夫故御納戸口石之間なとも歸候もの有之候哉之由也赤カツハ之もの三四人はかり其外青漆カツハ之もの一兩輩被踏倒候まゝに相成候もの有之或は口論なとも有之事實は不知刀を抜しよしなど風聞す大名之時服は御目付預にて二日に渡に成長持挾箱の碎等夥まして辨當破れ合羽類壘々成堆たるよし也歸宅早きは六ツ至る遅きは四ツ過にも成しなるへしわか方々來りしもの歸宅は四ツ前也といふもの三人有夫にても中之口いまたすかすと申たり中之口にて出ること不能家來四ツ前に歸り來るめつらしき事也長持其外之碎等相集候も八車ありしと申也

○四日 晴 年始人々來る

市三郎勘定

○五日 同斷 市三郎差引殘百四拾壹兩貳分

錢四拾三文内正月分渡金殘百三拾五兩壹分錢四拾三文

丙年知行所其外之納合金三百貳拾三兩壹分三朱銀七分五厘錢三貫貳百

六拾七文内拾壹兩三分貳朱銀七分五厘錢貳百三拾七文知行所貸渡納貳分壹朱百四拾文國役四拾壹兩貳分錢貳百四拾五文本郷地代四兩貳分友野地代五拾兩壹分壹朱喜三郎納七拾兩貳朱錢百六十文夏成百四拾四兩年貢

○六日 晴 年始來人有之

○七日 くもり 上に同じ佐渡人堀口市太夫目貫遣す

○八日 晴 年始來客有

○九日 晴 松平主税介其外年賀之客來ル

○十日 晴夕しくれけしき也 高山老婆來る

○十一日 晴風 年賀に人々來る甲冑いはひいたす例年之通也

○十二日 晴 太郎馬ためしに辰五郎召連候も池上へ參る

○十三日 晴 年始來賀之もの有之候

○十四日 晴 吉田四郎兵衛其外年始として來る

○十五日 晴 今朝家來麴町へ參り紀州之御退出之御けしき見あけ候處

○大小

安藤の不法もの

御急キに御道かはり御屋形を御迎も出候由之風聞いづれ一通り之事とは不聞と申候其内追々風聞承るに今朝對州御登 城之節坂下外におゐて不法もの有之拔刃を以立向ひ其前砲聲を御聞被及候而直に出與家來は勿論御自身も被拔放候由に付不法もの五人は場所にも即死對州も面部に聊かすり疵并腰之邊突疵被受候由に候得共いづれも淺手殊之外之御氣はりに而今日は御登 城は御風邪之由にも御登 城無之候得共疵所はいさゝか御懸念無之趣家來にも即死之もの三四人有之哉之處右は屋敷に直引取候故不相分不法もの壹人は逃去候哉に相聞畢竟自身御働も有之候故家來も死を極力をつくし候事と被察感服仕候御案事被成間敷候云々○不法ものは町人躰に相見候由風聞也

○十六日 晴 年始來人多し

○十七日 同上

○十八日 くもり風 淺野中書井上信濃其外來る中書は太郎縁者に成候

大氏重兼政兼之
房定國常定
兼重兼重政兼之
直勝宣國常定
兼直勝氏

初也

○十九日 くもり 松平主税之介來る

○廿日 晴 石川獻藏來る○刀拭

○廿一日 晴 來人なし

○廿二日 晴 來人なし

○廿三日 晴 松平主税助來ル蕎麥酒差出之○淺野備前石川丈山所持書入有之候七書十八卷差越ス

○廿四日 晴 來人なし

○廿五日 晴 知行所役人共年頭○井上信濃守來る

○廿五日 晴 來人なし

○廿六日 晴 大越へ書狀出す

○廿七日 晴 きしき宣女并兒孫二人來る

○廿八日 晴 宣女歸る松平主税介石川獻藏堀口市太夫永峯良三郎來る

大府御自作

氏房 兼定 忠國 無銘 兼刀 短宗 兼昌 保五

- 今日刀拭
- 廿九日 晴 關出雲守久保田治部右衛門來る
- 晦日 晴風 太郎當番

大胤 直次 宗同

- 二月朔日 曇 來人なし丸之内出火に付太郎寄場に出る
- 二日 雨又雪 來人なし木村董平方の魚を遣す
- 三日 晴 來人なし
- 四日 晴 石川獻藏來る
- 五日 晴 來人なし
- 六日 晴 松平主税助來る
- 七日 晴 來人なし
- 八日 晴 石川屋の金百兩相渡之書付并沾券狀取之
- 九日 晴 松村良右衛門來る忠四郎之書狀持參也刀拭

長吉 兼元 兼宣 正恒 左附 左大 筑前 大前 小打 短小 同宗 同斷 刀刀

- 十日 くもり 太郎當番黒坂丹助來る
- 十一日 雨 公方様御婚姻今日也○下谷邊出火竹町并濱田屋邊燒失也
- 十二日 晴 來人なし大工伊三郎の金五十兩下ケ遣し候之證文取之
- 十三日 くもり風
- 十四日 晴風 順作家内來る尾藩の人蒲田五兵衛來るたにさく遣す武藤銈三郎の之遣し物たのみ遣す
- 十五日 晴風 來人なし喜三郎方かうなきをくれ候
- 十六日 晴風 永田義次郎松平主税介石川獻藏來る
- 十七日 晴 來人なし夜に入高山隼之助來る十九日かな川の出立之由也
- 十八日 晴 御能有之太郎御給士に出る町入之由也○平尾良助養子權六來る逢遣す祠堂金之わけを聞故にとし經て忘れたりとて斷たり○大坂與力内山彦次郎の酒一樽くれ候

大 眞 恒 兼 兼 忠 康 直 年
守 次 元 吉 繼 次 号 直
小 兼 青 末 兼 兼 忠 康 直 年
光 江 定 元 廣 徹 顯 國

- 十九日 晴風 來人なし
- 廿日 くもり 昨日大越へ遣し候養女孫をともし來る貴志庄之助
手習はしめの清書もち來る保吉うた
うなひ子かけふわけ初し文のみち猶もゝとせも奥たつねてよ
- 廿一日 雨 おみほ歸る
- 廿二日 くもり風 高山老婆來る
- 廿三日 晴 太郎御能拜見として登 城來人なし
- 廿四日 くもり 來人なし
- 廿五日 くもり ○富塚順作來る ○刀拭
- 廿六日 くもり夜雨 鋏作もとる直太郎を肴くるゝ其肴にて酒のみて
字かく
- 廿七日 晴天氣殊によろし 樂水院様を御忌日に付太郎佛參
- 廿八日 くもり 昨日松平主税助市川弁吉淺田宗伯來る ○内藤豊太郎

來る

- 廿九日 晴風朝微雪 來人なし
- 三月朔日 晴 來人なし太郎夕當直
- 二日 晴 來人なし
- 三日 晴 節句例を通也
- 四日 晴 井上信濃守來る小酌 ○佐渡人來る國産をくるゝ田中寄太郎
之詩を序頼來る
- 五日 晴 松平主税介松岡千次來る
- 六日 昨夜五ツ時地震風邪に付平臥
- 七日 晴 高山隼之介來る
- 八日 晴 佐々木信濃守來る
- 九日 晴 高橋古太夫殿御出被成候花見とて家内之ものへ物爲給候

大十三日
重房定
氏重
兼重
直勝
忠國

- 十日 雨 來人なし
- 十一日 雨 同上 太郎當番也
- 十二日 雨 根津肇來る 淺野綠女持越之品々等申談遣す
- 十三日 晴 さむし 太郎淺野の下屋敷に參る
- 十四日 晴 井上信濃守廣瀬健次石川獻藏霍田仙太郎來る
- 十五日 晴 松村忠四郎妻來る
- 十六日 雨 未後晴 來人なし
- 十七日 晴 御目附へ内々聞たる子細あるましきと之事に付今日を例之禮拜いたす七日御請也
- 十八日 金藏來る 書二枚遣す
- 十九日 曇り風 講武所に御成に付太郎罷出る 御煮染赤飯のさゝ折被下之大風故調練砲之火入はなしと也
- 廿日 晴 來人なし ○佐々木の宋元通鑑三冊貸遣す

大廿一日
直胤
宗次
兼物
筑前物
兼光

- 廿一日 晴 太郎當直 ○久保田次部右衛門來る ○久保田千太郎かな川に引移見立として敬次郎參る
- 廿二日 微雨 風
- 廿三日 晴 井上藤左衛門來る 唐筆遣す
- 廿四日 晴 大工伊三郎呼寄候る 戸棚直し申付る
- 廿五日 微雨 松平主税介來る 北條氏よめ并妻共來る ○舊婢三人年始として來る
- 廿六日 晴 高村俊藏來る
- 廿七日 晴 直太郎實祖母の菓子其外くる、これは一橋蓮性院殿附にて細川へ參り居たるひくに也 ○大越貞五郎歸府後初來る 木綿又は玉印等くる、
- 廿八日 曇り風 畑山梅三郎歸府後初來る 土産くる、
- 廿九日 晴 吹上にて銃炮調練 上覽有之 太郎罷出る 大炮も有 御城

大廿八日
正恒
小國宗
忠俊

無銘紋附
大短刀 長吉
御城内 銃炮
調練

内に大砲の有たるは今日はしめなるへし
○卅日 雨 昨日富塚順作来る

○四月朔日 晴 大越貞五郎木村董平来る

○二日 くもり 來人なし

○三日 晴 松平主税介来る○大工喜三郎并同人伴伊三郎来る逢遣すこ
れは伊三郎を阿蘭陀に被遣候旨町奉行所に申渡候吹聴也

○四日 晴 石川獻藏来る例書々抜差越委細申談遣す

○五日 雨 市川弁吉來刀并さめを爲見候

○六日 晴 來人なし

○七日 くもり 松平主税介佐渡人并内藤豊太郎来る

○八日 芳賀榮之助来る

○九日 くもり 今曉地震井上信濃守来る

伊三郎阿蘭
行

對馬守殿溜
詰格

○十日 雨 來人なし

○十一日 晴 辰五郎来る同人かな川の御足輕に御抱入に相成引越に付
金貳分遣す

○十二日 くもり 來人なし安藤對馬守殿溜詰格被 仰付御刀拜領之由
これは昨日也板倉周防守殿に被下候道三橋之屋敷を對馬守に被下之西丸
下同人之屋敷に周防守殿被引移周防守殿并水野和泉守殿外國御懸り之由
也

○十三日 くもり 來人なし

○十四日 晴 松平主税之介来る○信濃守御船之御褒美有之候右福わ
けの肴代三百疋来る

○十五日 晴 太郎角筈へ調練に出る

○十六日 晴 石川獻藏来る酒一樽くれ候

○十七日 晴 來人なし初ほととぎす承る立夏は四月八日

廿日 大直 宗次 直次 同 小
 正恒 保昌 正國 長宗 吉
 筑前 打左 五郎
 筑前 打左 五郎
 新紋 附大 小
 新紋 附大 小
 新古 刀四 本
 新古 刀四 本

- 十八日 晴 來人なし
- 十九日 晴風 宮崎誠一郎來る茶をくれ候○山本新十郎來る肴くれ候
- 松平主税介來る
- 廿日 くもり 吉田四郎兵衛來る矢之根一本菓子一折くれ候挨拶に扇十本遣す
- 廿一日 雨 來人なし太郎當番
- 廿二日 雨 來人なし
- 廿三日 雨 内藤幸三郎來る
- 廿四日 雨 井上信濃來る桂城恒庵來る
- 廿五日 雨 内藤幸三郎并鷺香院來る自分誕生日に付家來共にも酒爲給候
- 廿六日 晴 高山老婆來る清兵衛松魚をくれ候宗次之大小刀遣候
- 廿七日 晴 高村俊藏來る○一橋殿尾張殿明日の御登 城之由一橋殿

廿日 大直 宗次 直次 同 小
 正恒 保昌 正國 長宗 吉
 筑前 打左 五郎
 筑前 打左 五郎
 新紋 附大 小
 新紋 附大 小
 新古 刀四 本
 新古 刀四 本

- は以前之通と被仰出候に付御隠居にはあらぬよし也川越濱田之兩公も登城之由也
- 廿八日 晴 大越貞五郎來る
 - 廿九日 晴 來人なし慷慨之あまり大醉
 - 卅日 晴 來人なし○刀拭
 - 五月朔日 くもり 石川獻藏來る鰐をくれ候
 - 二日 雨午後晴 來人なし
 - 三日 晴 廣瀬健次松平主税之介永峯善三郎久保田次部右衛門來る同人はずしくれ候
 - 四日 晴 淺田宗伯來る酒出す
 - 五日 くもり 富塚順作土屋金六來る
 - 六日 晴又くもり 來人なし

御後見御免

十三日

兼定 忠國 重房 康國 兼元 祐定

春岳會津御用部やの通

- 七日 雨 來人なし
- 八日 くもり夕晴 高山隼之介山本九十郎來る
- 九日 晴 來人なし
- 十日 晴 坂上丈助來る昨日御達 公方様御年頃にも被爲 成候に付
- 御後見田安殿は御免格別之思召を以被叙二位候由
- 十一日 日 吉田四郎兵衛○間瀬和三郎來る
- 十二日 晴 養女新家氏つる兒孫二人共來る
- 十三日 晴 黒坂丹助來る
- 十四日 晴 來人なし○高村俊藏來る
- 十五日 晴 長井淳右衛門内藤豊太郎來る○松平肥後守松平春岳御用部やの昨日被通大和守殿上京御暇被仰出候旨井上之書狀中にみゆる
- 十六日 晴 來人なし貴志新之助來る
- 十七日 くもり風 原田敬策來る

直九日 直勝 宗次 弘行 直九日

兼定 兼景 兼宗 長吉

廿一日 兼助 兼元 兼虎 兼忠 兼光 兼國 兼守 兼顯 兼國

上意其外

- 十八日 雨 井上信濃守來る
- 十九日 くもり又晴 耳醫慎齋來る
- 廿日 くもり 松平主税助來る富塚順作同斷
- 廿一日 雨
- 廿二日 くもり 今日被仰出候趣井上より申聞之日之通也
- 廿三日 晴又くもり 高村俊藏來る廿二日於席々御三家方其外の御直に 上意其外 上意之趣 近來御政事向姑息に流れ諸事虚飾を取繕ひ士風日に輕薄を増 御當家之御家風取失ひ以之外之義殊に外國御交接之上は別而御警備充實に無之候は不相成就は時宜に應し候御變革御取行簡易御制度質直之士風復古いたし御武威相輝候様被遊度候間一同厚相心得可勵忠勤候同日水野和泉守殿諸役人の御渡御書付只今 上意之趣殊に奉恐入難有義に御座候いづれも厚相心得 思召行届候處一途に心懸抛身命可被抽忠勤候猶追々被仰出候品可有之候間心得違無之様可致候

外御誕生月共

伊三郎阿蘭
立の近々出

- 廿四日 晴又くもり八十二度之暑に成 大越貞五郎桂城恒庵來る
- 廿五日 晴又くもり 石川獻藏來る人のはなし此節 上は御別段也今日
日は 御誕生日なるに先例之奥御祝もなし鳥は常に被飼候處三千に近かり
りしかみな御小性御小納戸に被下けりと也難有御事也
- 廿六日 くもり夕雨 來人なし
- 廿七日 くもり又雨 家來用人田村與助在所に墓參として今日出立○
大工伊三郎來る近々阿蘭陀の出立之由來月八日也
- 廿八日 くもり折々雨 來人なし高村俊藏を鮮魚くれ候
- 廿九日 くもり 根津金次郎窪田治部右衛門來る
- 六月朔日 くもり雨 松平主税介來る○昨夜東漸寺へ何ものに候哉來り
り英夷ミンスト并下官共都合四人切殺候而逃去候由○今日 上洛被仰出候由

公方様御檢
素

八日刀拭
大國小
忠國忠
左定兼
兼定無
兼卷直
直勝次
直勝氏
短刀兼
景

- 二日 くもり又雨 來人なし荆婦佛事に付大越へ參る
- 三日 雨 桂城恒庵來るこれは炊婢之眼病故也
- 四日 あけほのは雨辰刻を雷雨午刻を快晴にて西風也○荆婦大越之法
事を今日歸る○小林金藏參る
- 五日 くもり又雨 來人なし或る人の申たるに此節 公方様世上困窮
之事を御挽回之 思召にキヒラ之御召にてスハヒラの御袴被爲召候由
也
- 六日 晴 松平肥後守家來并松平主税介等三太夫來る
- 七日 くもり晴 來人なし
- 八日 くもり 川瀬幸三郎熱田雄庵廣瀬範次來る範次は酒食差出す幸
三郎は玉子くれ候うつり遣し候
- 九日 晴 箕作阮甫一昨日來る海國圖誌一冊貸遣し候風説書板本かり
候○廣瀬範次を遠思櫻遺稿貳冊くれ候

○十日 くもり又晴 太郎御役日に付家來其外の酒爲給候○勅使大原左衛門大尉八日之着也今日登城之由八ツ時過までも退出之沙汰なし○昨日のよし宰相局其外京々被參候女中并江戸の表使等一同傳奏屋敷の參候る三位へ面會之由八ツ半時迄は退出之沙汰なしと也

○十一日 晴 富塚順作來る

○十二日 晴 御佛參例之通也來人なし

○十三日 晴 來人なし

全齋拱手攫燕兵 義士誰爲國重輕 七十二城皆北向 一時忠憤鴈書生
王蝸之詠史也玉堂鑑鋼七ノ十一にのせたり○廣瀬淡窓弟子をも不取みつから樂しみて居たるに子の才を以いなかに獨書をよみて居世の爲を不爲は以之外也みせたる詩文は水へ投し捨よと申たりし人は倉重湊と申人も其人は 其の也

○十四日 晴 來人なし

淡窓の異見
之友
王蝸之詩

山王祭禮
上覽なし

○十五日 山王祭禮有之され共 上覽はなし此節故なるへし右故に御屋形向見物所にも不參けしからず祭早くすみたるよし也

○十六日 晴 今日嘉祥御祝義無之 殿中平服之由也石川獻藏來る○奥に嘉祥御内々有之候由に御風味之まん重其外山本新十郎來る

○十七日 晴 山本新十郎大越貞五郎來る

○十八日 晴 來人なし昨夜家來田村與助在所を歸來る

○十九日 晴 吉田四郎兵衛來る

○廿日 晴 來人なし

○廿一日 晴 來人なし

○廿二日 來人なしくもり也

○廿三日 雨六十七度之冷氣 井上信濃守來る

○廿四日 晴八十二度之冷氣 窪田次部右衛門松平主稅助北條松太郎來る次部右衛門は酒食差出す

春日神鏡變

○廿五日 晴八十二度也 暑中の人々来る忠四郎が書狀来る唐昏をくれ候なら人狹川常三郎来る當正月二日春日大宮の神鏡おのつから落てひゝわれたり其こと京地に 奏聞したるに三月中に 勅使三人被參候而御祈禱有之候由希代に珍事也と申よし也

○廿六日 晴八十四度也 暑中として人々参る

○廿七日 晴 中村出羽守其外暑中に人々来る

○廿八日 晴 來人なし

○廿九日 晴 同上

○卅日 晴夕くもり 根本善左衛門事去ル廿七日病死今日葬送寺は麻布日蓮宗本明寺太郎并謹吾も供いたし申候法号は善幽院殿靜空魯睡日詠居士

○七月朔日 晴九十度也 松村良右衛門其外来る

○二日 晴 松平阿波守より家來儒生三上幸次側向森雄助を以無沙汰被相尋候藏板之瀛環誌略一部被惠候

○三日 晴 廣瀬範次来る其外暑中尋として参るもの數輩也

○四日 くもり 根本七日に付太郎佛參敬次郎も同様也○みわ来る松魚をくれ候

○五日 晴 北條雄之介其外暑中として来る

一橋御再職

○六日 おりく雨 淺田宗伯来る一橋殿 思召を以御再相續被 仰出 十萬石被進 叡慮之趣も有之候に付 御後見被 仰出候

○七日 おりく強雨 太郎忌中に付七夕之禮なし來人なし

○八日 くもり折々強雨 來人なし

○九日 晴 箕作阮甫来る酒をくれ候

○十日 晴 内藤幸三郎永田義次郎来る

○十一日 晴 大越貞五郎石川獻藏来る

十九日
兼定 正常
其外

○十二日 微雨 貴志彌三郎妻出産に付祝として金三百疋肺十本遣す出生之新孫万吉と号候旨申來る

○十三日 雨 富塚順作來る

○十四日 くもり 家内中はしか病人に付魂祭はいたすことはおきて家來一同に爲給候様にいたさす追ひいたし候積

○十五日 終日大雨七十八度 野田を生みたまくれ候信濃守參る同斷也

○十六日 快晴夕雨 昨日松平春岳殿信濃守を以自分此節之様子御尋被下候石川獻藏來る大津音次郎同斷

○十七日 晴朝六十八度九ツ半時八十一度 來人なし家内に忌中之もの有之 神拜いたし不申候當主并次男共也

○十八日 晴 松村賢之丞來る○なら惣年寄來る逢遣し候團扇くれ候

○十九日 くもり又雨 來人なし山本を一橋殿御後見に付御自書に御家來之御達寫借用別記

○廿日 晴 久保田治部右衛門來る同人近習番頭取次席被仰付之五人扶持十一兩被下之候由之吹聴也又同人咄に春岳殿兩度吐血有之候由大に驚たり

○廿一日 晴 來人なし

○廿二日 水野良助淺田宗伯來る今日晴也

○廿三日 晴 樂水院様御七回忌智定院十三回忌取束候也今日法事いたす大正寺院主來るはしかにて太郎はしめいまた肥立不申候に付明日謹吾を遣し候積はしかにて可來ものも無之家來も下女もみな同病に付客は招き不申候

○廿四日 大正寺に謹吾を惣名代に遣す太郎いまた肥立不申故也

○廿五日 風雨 來人なし

○廿六日 佐渡地役人共々文通有うきたこ葛其外國産をくれ候

○廿七日 晴 來人なし

○廿八日 くもり又晴 來人なし
○廿九日 晴又くもり 昨日木村董平來る今日豊太郎來る

○八月朔日 くもり又晴 大熊善太郎後家病死くやみの使者を出す

○二日 雨 刀拭

○三日 くもり又晴 太郎當番はしか後初也○高村俊藏をさかなくれ候

○四日 晴 昨夜彗星を北方に出る光芒微也曉八ツ時にはみえす

○五日 くもり かけ樋毫藏來る酒くれ候○刀拭

○六日 晴 石川獻藏來る

○七日 晴 松村良右衛門來る肴くれ候

○八日 井上信濃守來る懸樋毫藏來る同人こと永井はたのみ遣す毫藏を差出候圖壹枚留置二枚戻し遣す

二直日 直勝 直國 忠次 宗次 正次

同人 兼人

五兼日 兼守 眞次 直吉 忠國 重國 小恒 小刀 太刀 小刀 延銘

コロリ藥

○九日 くもり又晴 來人なし○神田鍛冶町賀川と申醫ころり之藥代百文也よく効有よし也○コロリはキナエン三分ツ、半時間に用ひてよろしホフマン十五滴ラウタニフ八滴を合て十滴のむへし上焼酎を多くのむもよしコロリは腹痛なくはしめより水瀉にて直に脱肉はしめはらいたみ下痢有は多く五苓散をのむへしこれは暑氣當之故也と淺田宗伯はなし也

○十日 くもり又雨 來人なし

○十一日 晴又くもり 昨日芳賀榮之助來る今夜六ツ時過麴町四丁目

出火目廻に人々來る

○十二日 晴又くもり 九條殿雜掌某妾宅に隠れ居たるを浪人共四人にて參り引出しなふり殺にいたし候上首を切四條河原へ高札をかけ獄門なとのことくにいたし置候由

○十三日 晴又くもり 廣瀬範次暇乞として來る

○十四日 雨 來人なし○市川弁吉方は不快見舞として敬次郎遣す○フ

雜掌きられ

ランス人コレラの薬法○半夏八分○竹節人參四分○乾姜四分○大棗四分黄
芩四分○黄蓮二分吳茱萸五分○芍藥四分○甘草三分桂枝三分右十品水二合半
入壹合半に煎し生姜三片入これは異人の教也淺田宗伯云五茱萸五分は多
し黄蓮同斷宗伯は○印の分を以療用すると云

○十五日 くもり夜月なし 來人なし

○十六日 くもり 富塚順作來る

○十七日 くもり 太郎方へ蘭學共數人來る酒など出し候

○十八日 晴昨夜風雨 來人なし

○十九日 晴 來人なし江川太郎左衛門病氣に付太郎を遣す十五日大切

之由也はしか後脚氣也○或人の咄に過日 上御目付部や風といらせら
れ御はなし等有之候由也一橋殿とはことに御懇に屢御菓子等被下世に
いふ御相口と申様なる御様子に過日も六ッ時迄御はなし等被爲 在候
由恐悦之御事也

江川
或人云

日下部伊三
次養子

○廿日 くもり 宮崎復太郎事日下部伊三次跡相續之養子海江田武次來
る島津三郎に附添候而出府明日出立之由菓子并扇子くる、素槍穂壹本遣
す復太郎之苗字元來は海江田に付右之苗字名乗候由申之武次は有田次左
衛門兄也と申たり

嶋津三郎出
立

○廿一日 石川獻藏來る菓子并茶をくれ候○淺田宗伯來る○永田義次郎
來る飯并酒を差出す○嶋津三郎出立を見たる人の咄に侍分三百人以上銃
炮五十挺も有へし大造也こと也

英夷被切

○廿二日 晴くもり 富塚順作來る○嶋津三郎途中生麥におゐて英夷に
出逢壹人を切殺し貳人に深手を爲負女壹人の切附其旨金川御役所へ申立
候まゝ出立いたし候由

○廿三日 快晴南風 太郎當番○公家衆大原左衛門大尉も出立いたし候
を永井主水正乗切に差止之事申立候由

○廿四日 晴又くもり 土屋大膳亮嫡子病死之旨申來る○井上信濃守外

鳴津異人

國奉行被 仰付之右に付夫々の太郎を遣す
 ○廿五日 くもり六十八度之冷氣○畑山の弟來る富塚順作同斷
 ○廿六日 雨 太郎頭柴田能登守方の被參候相番衆一同弁當也○井上信濃守一昨日外國奉行被 仰付候吹聴として來る
 ○廿七日 雨 大越定五郎來る薩人英人を切殺たるは嶋津三郎差圖にてなくさみ切同前之由日本人之別當之申口有之候由横濱滞泊之各國異人より品々申立も有之候由三郎之取計不審也英夷は三郎切腹いたし候は、宜左も無之候は、薩州の參候可及戰爭候日本政府へ對し候は、聊存意無之旨申之候由

廿八日刀拭
 兼小 兼元
 兼定 兼元
 兼忠 兼元
 兼重 兼元
 兼直 兼元
 兼貞 兼元
 兼景 兼元

○廿八日 雨 富塚順作來る○今日刀拭
 ○廿九日 微雨 根津肇來る羊羹くれ候うつり遣し候
 ○晦日 微雨 窪田次部右衛門淺田宗伯來る

佛之番人

○閏八月朔日 くもり 土岐虎之介細藏健左衛門來る
 ○二日 雨 健左衛門話に佛人かな川の關門の參候あはれ番人のたふさをとり引すり旅宿のつれ行たるに組頭若菜三與三郎懸合候而受取來りたるよし其番人は穩順也とてよき懸に成其時何故に佛人をさし殺死せざる哉と申たる同役は歸宅せしと也○今日松平肥後守上京守護五ヶ年詰被仰付之候由

肥後守上京

○三日 くもり 内藤幸三郎來る
 ○四日 くもり 内藤幸三郎外壹人來る
 ○五日 くもり微雨 石川獻藏來る
 ○六日 晴 來人なし○土岐虎之介來る戸田左近方の謹吾養子相談之義申來る可及相談旨及挨拶
 ○七日 くもり昨夜雨○土岐虎之介の再勤申付る
 ○八日 くもり 虎之介肴をくれ候

直四 直子 直人
 直カ 直光 直宗
 重國 兼信
 正恒 兼宗
 小サ 兼上
 筑前 兼起
 戸田 兼子
 一件 兼之

○九日 くもり 淺野備前守大越貞五郎來る○戸田左近方の謹吾養子之世話人徳永伊豫守家來若園要人の初面謁候而來る十三日兩敬爲取替廿三日結納且養子願相濟金百兩引移金百兩家督濟金百兩金三百兩差支金として可差遣旨之覺書差遣す

鈴木安之進
初面謁

○十日 晴 今日屋敷鎮守明顯大明神祭禮也通玄院爲讀經參る家來の赤飯其外遣す○今日御徒にて元家來小林金藏の申込に水戸殿御家來小納戸格旗奉行鈴木安之進來る初面謁也同人は藤田誠之進從弟女婿也との事に誠之進は別懇たりし故を以逢遣し候○元下女まき來る同人伊達遠江守奥方次之女に被召抱候而近々在所に引移候故を以暇乞として來る但五年詰之由也

○十一日 雨 富塚順作來る
○十二日 雨午後電迅雨 來人なし
○十三日 雨 松平主税介井上信濃守來る

○十四日 快晴 富塚順作來る

○十五日 土屋大膳亮高橋氏女これは西國に參る暇乞也若園要人妻并虎之助娘來る市川弁吉來る

○十六日 くもり 犬塚庄藏根津肇來る

○十七日 雨 市三郎來る同人同家の金二十兩世話いたし可遣旨答遣す證文來る○麥蕎をうち候而鷲香院に振廻候

○十八日 くもり 山本新十郎富塚順作來る

○十九日 雨 御寶藏番頭河野七太郎大病且同人悻七三郎大御番今朝病死之旨爲知來る七太郎はわか養女桑原氏原原賀にて七三郎は孫也○白痘瘡と云病

白痘瘡之藥

有疔之類之由傳染する也其藥は鷄冠石を水にてのみ且青の菊の葉と甘草をのむへしと淺田宗伯いへり尤急なる症にておくるゝときは死にいたるよし也○謹吾頭を達に付講武所に出る奉行逢有之候

○廿日 雨 來人なし

隨筆を貸す
羽倉大病
廿日 忠吉 兼定 兼元 康繼 直次 青直 江次 大和
忠吉 兼定 兼元 康繼 直次 青直 江次 大和

○廿一日 雨 大越定五郎小林金藏來る貞五郎は刑法隨筆貸遣す○羽倉外記今曉病氣差重之旨爲知來る
○廿二日 雨 羽倉外記方の悔の使に土岐虎之介を遣す○刀屋河内忠右衛門病死之由申來るかれは從來出入申付たるもの也大原真守之刀等かれより求たり○長峯良三郎來る
○廿三日 雨 戸田左近を使者を以肴壹折貳百疋麻上下代金千疋來るこれは太郎弟川路敬次郎事謹吾養子にもらひ候に付結納也使者は支度并目錄遣之謹吾を直答也此方も用人使者にて挨拶之干鯛遣す直答はなし○右に付家來共酒爲給候○久保田次部右衛門師匠之廉内藤幸三郎井上信濃守を迎へ候酒食等差出候次部當番也衣服御改正之御書付出る
○廿四日 雨少々晴 來人なし長峯良三郎來る水野下總守隱居願差出候旨申來る
○廿五日 雨 石川獻藏來る

廿九日 忠吉 兼定 兼元 康繼 直次 青直 江次 大和
廿九日 忠吉 兼定 兼元 康繼 直次 青直 江次 大和

○廿六日 雨 來人なし○木村敬藏方の今般之怡之使出す堅魚遣すうたうき雲はあとなくはれて大空に再ひすめる月のさやけさ
水野下總守方の隱居願いたし見舞遣す
○廿七日 くもり 河野七太郎病死に付香典二百疋并菓子遣す
○廿八日 くもり 來人なし○高村俊藏はひの赤飯并肴くれ候○土屋大膳亮を金吾方の袴地并肴くれ候
○廿九日 くもり
○九月朔日 くもり夕雨 富塚順作根津肇來る○次女來る高山氏の妻也
○羽倉外記病死に付茶并花を太郎に爲持遣し候
あすの日はわれも行ぬるみちなからしはしか程のわかれかなしも
あすよりはいかに世を経む君のみそむかしをかたる友にありしか
○二日 晴 謹吾内藤幸三郎方の参り候○佐州之地役人共來る彼地産之

瑪瑙をくれ候

○三日 晴 淺田宗伯來る

○四日 朝四ツ時々晴 ○富塚順作來る ○若園要人來る 謹吾養子之義引移

申來る日限記し遣し候

○五日 くもり 來人なし

○六日 微雨 松岡千次郎來る

○七日 くもり 畠山角同駿三郎内藤豊太郎來る かつれもへ食事差出す

角太郎は貸置候十夕筒返却せり

○八日 雨又くもり 松村良右衛門來る 淺田宗伯へ瀛環志略貸遣す海國

圖志返し來る

○九日 雨 來人なし 家來共隱居所に禮に來る

○十日 雨 富塚順作來る

○十一日 雨 上田直之丞金藏來る ○地震

○十二日 くもり 元婢松來る 同人近々野州すきや村へ引越候 由土井銈之允知行也

○十三日 晴 堀口市太夫暇乞に來るセむ遣す 赤銅代并あらめの代遣す

○十四日 謹吾事明日引移に付 今日道具遣す 大小四通り 正宗朱銘之短刀

遣す かつれも拵附也 其内忠國は専ら實用之旨 山田淺右衛門殊更に賞した

る品に付遣す 最上胴之甲冑遣す 冑は六十二間に中納言齊昭卿所賜と彫

有 胴其外は明珍宗周作也 ○謹吾へ申聞候覺

一 第一に養父母へ末永く力をつくし候 而心の及手の届候かきり 孝行すへし

一 養家の家法に随ふへし

一 養方之先祖に敬禮を忘るへからす

一 徳川家譜代の御旗本也 万一の御用あらむとき 命を可捨といふことを朝
夕わするへからす

謹吾道具讓

謹吾教訓書

一學問片時も怠ることなく武藝出精し其内に劍術は毎月十五度以上遣ふへし

一養父母の差圖を得て養家の親族龜末にならぬ様にすへし

一おもひ附の事はとおもふこともすへからすわろきこと勿論なすへからす酒を呑候事年の若者尤禁忌とおもふへし汝か幼名は敬次郎今は謹吾と申也名に背かぬ様に心得都て予に話されぬことは決て不爲と申大綱を急度守るへし 文久二年九月 川路敬齋記之

○十五日 晴 戸田左近方の孫謹吾引移に付見立として親族共之内井上内藤等來るいづれも酒食差出す持參金百兩爲持遣す殘百兩は願濟之上遣し候積家督濟に百兩遣候積供立は鍵箱上下供乗馬にて遣す○松平主税介來る

○十六日 くもり 富塚順作來る

○十七日 雨 家來用人田村與助再應之願無余義暇遣す同人は上總國東

田村與助暇遣し候

金之脇之ものにて元來寺社方調役之節之箱持也段々と取立候て用人にいたし候處在所に引込度と之義兼て願之處今般出生村により百姓株明き有之候て夫を引受候故也三十年余之奉公に付先達も自分隱居いたし候節用人はしめぬ金子遣し候節も金子遣し候ひしか今般別段に金五兩奥方五百疋其外衣類反物等遣し候昨夜酒を給させ候て寺社奉行もらひ置候銀之猪口に梅花之彫有之候を遣し候て酒をのみ候事有之候は、其節に敬齋をおもひ出候へとてかたみに遣し候今日出立之積之處雨にて延引也

○十八日 くもり 來人なし戸田に遣し候孫之方庭の池にて釣たるよしに鮒其外を贈り候

○十九日 くもり 來人なし

○廿日 くもり又晴 齋藤源藏來る

○廿一日 晴又くもり 老釵信濃守方の參候賞菊也

○廿二日 くもり朝雨 戸田謹吾來る齋藤源藏蕃書調所勤役組頭兼被

座右日記 (文久二年九月)

仰付候由之吹聴也

○廿三日 曇り 高橋美作守之土産をくれ候目戸帯刀來る

○廿四日 曇り 來人なし○太郎當直

○廿五日 曇り又晴○昨日吉岡靜助近々長崎出立之暇乞に來る菓子

くる、うつり遣す○此節 御成通御之節人留なしにて御乗切之由也

○廿六日 曇り又晴四十二度也 來人なし

○廿七日 曇り 昨日鏡作之書狀并金二十兩來る金子は直に貞五郎

預け置候

○廿八日 曇り 來人なし

○廿九日 曇り又晴 講武所之昨日被仰出候之今日 御成太郎罷出る

○卅日 來人なし 曇り

○十月朔日 快晴 佐渡人上原清十郎悴來る土地之産物なとくれ候

御成之節人留なし

詩文章

○二日 曇り 横山鐘三郎來る○市三郎再ひ養家之引移に付今日は祝

ひとしゝ夫婦之食事爲致候

○三日 雨 今四ツ時市三郎養方之妻一同參る○敷山徳次郎來る唐筆墨

朱をくれ候

○四日 曇り又晴 太郎當直來人なし

○五日 敷山得次郎來る○昨日當番之面々に詩作文章の即席御尋有之太

郎は詩作可仕旨申上候由其外兩三輩も有之候由也然に詩之題は不出文章

は御題出候之壹兩人記し奉り候由也

○六日 快晴 謹吾來る根津肇妻ならへ參候暇乞に來る菓子くれ候猪口

其外遣す

○七日 曇り 來人なし○高村俊藏之書狀來る羊羹くれ候日光大樂院

に有之候 大猷院様御上洛道の記寫を越し候みな月十日りうゑいを出御

の御うた十日は廿日の書損のことし

寛永御上
洛の御うた

座右日記 (文久二年十月)

百十八

旅とてもいつくも同じ我國のやたてもあらし照す日のもと
廿二日小田原に御着御逗留廿四日箱根を御越三嶋に御懸久能御參詣廿六
日駿府御着御逗留廿九日田中の城卅日懸川の城朔日濱松この所五社大明
神御參詣三日吉田の御たち御出立と有城なるへし五日なこや御逗留六日
御立七日彦根御泊十日膳所之城十一日二條御着十八日御 參内おほきお
ほいまうちきみの位御辭退の御歌

くらの山昇れはくたるよの中の世のありさまはかくはかり也

○八日 雨 來人なし

○九日 くもり風 尾州御家來蒲長三郎來る昏くれ候うつり遣し候○原
田市三郎來る

○十日 晴風○蒲長三郎書をたのみとして來る

○十一日 くもり 太郎はしめて戸田へ參候

○十二日 晴 來人なし○謹吾事今日九時ふくさ麻上下着用講武所に可

差出旨同所を達有之罷出候處調練太鼓教授方手傳被仰付候旨講武所奉行
か申渡有之候

○十三日 晴 松平主税介松村健之丞來る

○十四日 くもり又晴 井上信濃守原田市三郎來る○武德編年集成四ノ
三十に梅か坪廣瀬舉母ノ諸城にも一ヶ月に五三度 御出馬有しかは小迫
合年中五十度に及むて御家人晝夜安き心なく傍に兵器馬具を離さず軍を
常として粉骨を竭すと云々 神君御年十九永祿三年庚申年也

○十五日 晴 富塚順作來る○奈良奉行山岡氏來る以前之問合也

○十六日 くもり又晴○松村健之丞來る

○十七日 くもり 來人なし淺野備前守町奉行被 仰付太郎悦として參

る

○十八日 晴 石川獻藏窪田次部右衛門大越貞五郎重井復右衛門來る次
部右衛門貞五郎には酒食を出す

神君一年五
十度御出陣

座右日記 (文久二年十月)

百十九

○十九日 快晴 原田市三郎来る同人知行之一件初る今日虎之介の申付
爲相行候

○廿日 雨 内藤幸三郎来る

後藤彌四郎
四男

○廿一日 雨 後藤彌四郎四男といふもの来る淺田宗伯来る

○廿二日 大風又雨○原田市三郎久保田治部右衛門松村健之丞来る

○廿三日 くもり 來人なし

○廿四日 晴 原田市三郎来る○同人知行所之一件日延に吟味なし

○廿五日 くもり 後藤彌四郎之四男來候る鯉節を差出候を差戻候旨虎

之介申聞る

○廿六日 快晴 高山隼之介来る戸田謹吾同斷○昨日石川庄次郎来る同

人御軍艦調練所之組頭被 仰付候旨之吹聴也

○廿七日 くもり○原田市三郎知行一件吟味下願書差出す

○廿八日 晴 來人なし○諸色直下之御觸有しなるへし醬油十六匁五分

より表向高直なるはなし内實の直段は宜は貳拾五匁以上之由也これは觸
を出候町役人の印形一ツにて事濟故なるへし奸商可憎

○廿九日 晴 富塚順作来る○原田市三郎知行一件に付同人来る家來
土岐虎之介吟味いたし候る今日内咄いたす即承届候

○十一月朔日 晴 來人なし○市三郎方新吉郎の帶代くれ候

○二日 晴風 敷山篤次郎来る河野後家来る

○三日 晴又くもり 來人なし○太郎講武所に參る

○四日 雪夕晴○坂本健三郎来る

○五日 晴 原田市三郎来る○小兒新吉郎庭にて倒怪我いたし候に付肩
輿にて熱田祐庵方に遣す

○六日 晴 富塚順作来る内藤豊太郎来る

○七日 井上信濃守内藤幸三郎来る

○八日 晴風 松村良右衛門妻來る肴菓子くれ候うつり遣し候
 ○九日 晴風 黒坂丹助小林金藏來る
 ○十日 晴 松平主税介來る戸田謹吾來る
 ○十一日 晴風 松村良右衛門富塚順作來る原田市三郎來る
 ○十二日 晴風 昨夜雨己午之頃五十五度にいたる○來人なし
 ○十三日 くもり又晴 敷山篤次郎横濱行の暇乞として來る淺田宗伯荆妻不快に付來る
 ○十四日 晴 原田市三郎井上藤左衛門戸田謹吾來るこれは謹吾戸田家の養子に參候に付否之糺として戸田相組之世話不明□□參候故也太郎謹吾は麻上下也茶たはこ盆之外取扱なし
 ○十五日 晴 末子新吉郎三歳に相成候に付市谷八幡に參詣爲致候供は用人中間乳母并用人之娘也○井上信濃守富塚順作來る○昨日淺野備前に遣し候書狀返書來る

掃部頭其外御咎

○十六日 雪 來人なし
 ○十七日 くもり 來人なし○淺田宗伯來る
 ○十八日 晴 來人なし
 ○十九日 昨夜講武所を達に付謹吾差出候處講武所泊り方并 御上洛之御供被 仰付候旨講武所奉行を達有之候○富塚順作海軍調練所之繪圖方出役被 仰付候吹聴として來る
 ○廿日 晴○昨日尾州之蒲氏來りて歌を乞候に付認遣す五兵衛
 ○廿一日 晴 井上信濃守大越貞五郎横山鐘三郎其外來る右三人は酒飯出す○昨夜掃部頭其外御咎有之候由
 ○廿二日 晴廿九度之寒氣也 來人なし
 ○廿三日 晴 廿三日夜も數人來る 原田市三郎來る
 ○廿四日 晴 原田市三郎來る村方之もの役有之
 ○廿五日 晴 土屋大膳亮其外來る

○廿六日 くもり 内藤豊太郎来る
○廿七日 はれ六十一度之過暖中數一段上り也○今日臨時參向之公家衆御對顔諸太夫之面々迄衣冠也元來大紋之御禮なれとのしめ之論有之候故なるへし

○廿八日 晴 久保田次部右衛門松村良右衛門来る

○廿九日 くもり○市川弁吉箕作阮甫坂上丈助其外来る○一二番長持共

刀拭

刀拭

○卅日 風晴 松平主税助根津金次郎来る

○十二月朔日 晴 原田市三郎来る○井上信濃守町奉行被 仰付右之款として太郎參る○赤坂邊出火永田義次郎類焼に付家來遣し且松板代金三兩遣し候

○二日 井上信濃守永田義次郎松岡千次大越貞五郎来る

○三日 くもり夕雨 富塚順作土屋金六来る

○四日 雨五十度之過暖○長峯良三郎前田小一郎来る○高山隼之介来る一橋殿航海に御上京に付右之御供いたし候由暇乞として来る

○五日 晴大風 青山邊出火風筋至る不宜所々々見舞来る○内藤幸三郎戸田敬次郎来る

○六日 晴風 淺田宗伯来る○原田市三郎知行所々年納金五十兩来る

○七日 晴風○内藤豊太郎石川獻藏齋藤源藏山本新十郎原田市三郎松村良右衛門畑山梅三郎来る

○八日 晴 來人なし 井上信濃守今日御役宅南町奉行所之引移に付衣籠之内遣す

○九日 くもり 來人なし

○十日 晴 畠山角太郎一橋殿御供にて上方筋之參候に付軍扇を遣す

○十一日 晴 桂城恒庵主人之供いたし在所之罷越候に付爲暇乞来る○

大坂元組同心渡邊勝太郎用人附添として出府之旨に來る扇子箱くれ候
 ○十二日 晴 高山隼之助來る
 ○十三日 くもり すゝ拂いたす
 ○十四日 晴 内藤豊太郎一橋殿御附添に明日出立に付家來遣す太郎
 は當番也畠山角太郎明日出立に付暇乞に參る同人頼に寄箆の字記し遣し
 候
 ○十五日 晴 富塚順作來る一橋殿今日御出立之由
 ○十六日 雨 來人なし
 ○十六日 晴 森山多吉郎遠目かねをくれ候關組袴塚幸藏來る
 ○十七日 晴 ○袴つか來る此人は通稱達と云儒生也今般いせ參宮之由暇
 乞也夫々内實上京いたし候含と相察候水府之産藤田誠之進一同一旦國入
 之人也
 ○十八日 晴 酒井良祐來る

○十九日 晴 川せ幸三郎來る字認候而遣す
 ○廿日 晴 來人なし
 ○廿一日 晴 森山多吉郎來る西洋各國に參る魯英佛字蘭^{五ヶ}國王に謁
 見候由杉田彌平次之次男來る太郎當番
 ○廿二日 晴 杉田彌平次々男宮岡謙次郎來る木村敬藏久保田次部右衛
 門原任藏來る
 ○廿三日 晴 富塚順作來る○太郎誕生日之祝
 ○廿四日 晴 尾州御醫師伊藤桂介來る
 ○廿五日 晴風 市ヶ谷邊出火直に鎮り申候○大坂惣年寄并町代共來る
 土産等くれ候
 ○廿六日 くもり○彌平次忰宮岡謙次郎來る○もちつき也○江川太郎左
 衛門を鯛をくれ候
 ○廿七日 くもり 戸田謹吾來る

○廿八日 雨夕晴 富塚順作来る柿くれ候
○廿九日 晴 石川獻藏来る新家直太郎は刀遣す

文久三年癸亥正月元日 くもり折々雨○昨日直太郎武術出精新刀左秀行
之刀遣す○年頭に人々参る

○二日 晴風 年賀人々来る

○三日 晴 年賀に人々来る

○四日 晴 年頭に人々参る

○五日 昨夜雨又雪○年頭に人々参る

○六日 晴 年頭客来るなら町年寄来りて申に去十一月中旬吉野山

後醍醐帝陵鳴動甚敷前後三日程之内に陵之石かき瑞垣等みな散亂いたし
候而恐入たることの由申之其外今般薩州を 禁裡へ献上之御米を神社佛
閣へ御奉納有之興福寺にも被下候に付御寺務大乘院門跡を受取之もの差

動さ、き鳴

出候處同門跡之家來へは不相渡旨之義等けしからぬ建札いたし候もの有
之候に付早々歸南いたし候而一乘院宮御家來受取候由大乘院は九條殿御
つゝき之由也

○七日 晴 年始客来る

○八日 晴 暮をおくれにもちをつき申候○年始に人々来る○大坂なら
の年寄共與力同心共ものくれたる挨拶を差出す

○九日 晴 貴志彌三郎用事有之参る小石川白山邊出火新家直太郎参り
たりとて咄有

○十日 くもり 來人なし

○十一日 晴 具足之祝ひ例之通也年始として人々来る

○十二日 晴 平岡圓四郎来る

○十三日 晴 太郎當直

○十四日 晴 内藤幸三郎来る鷺香院を招候而年始之酒差出候

○十五日 晴 家來土岐虎之助の刀一振遣之筑前打之新刀也○忠四郎の書狀之内横濱之義横濱町戸部町野毛町太田町四ヶ町ニ去ル末年御開港之節は家數六百十四軒人數三千四拾六人文久二年戌年には家數千八百二十一軒人數八千貳百九拾七人に候得共内實は一倍も可有之哉女小使俗ヤ男小使は人別之外に付不相分候云々

○十六日 晴風 高山之老婆いとそ振舞いたす原田市三郎來る○昨日戸田謹吾來る

坂本引越

○十七日 晴 坂本源太郎根來百人與力之處京住居之與力に成彼地の引移に付暇乞に來る健太郎は實方之母方從弟違也

○十八日 くもり 來人なし○古太夫殿の書狀來る

○十九日 雨 窪田次部右衛門來る

○廿日 晴昨夜今朝より晴 内藤幸三郎來る

○廿一日 晴 原田市三郎來る○夜九ツ時太郎方は明日御城に可能出

旨之御奉書來る四ツ時也受いたし遣す

○廿二日 くもり微雨 太郎御小納戸被 仰付之右に付人々來る

○廿三日 雨 太郎之歡に人々來る

○廿四日 くもり風 太郎之歡に人々來る

○廿五日 くもり 太郎休以前之相番の酒振舞いたす歡として人々來る

○廿六日 太郎初之泊番也弁當等之別段手當なし坊主并六尺の之目錄のみ也

○廿七日 雨 太郎御上洛御供被 仰付候 御發輿翌日陸路出立之由也

○廿八日 くもり 太郎之喜ひとして人々來る

○廿九日 くもり○太郎之怡として人々來る

○二月朔日 くもり○富塚順作河野七太郎來る

太郎布衣

- 二日 雨 太郎布衣被 仰付之來人なし家來共酒爲給候
- 三日 晴 娘共高山貴志來る止宿也土屋金六土屋大膳亮來る
- 四日 晴 羽倉外記跡相續人初見齋藤源藏内藤幸三郎來る
- 五日 晴 會計改一番貳分判百四十三兩二番貳朱金百二十兩三番貳朱金百兩○甲金貳兩貳分○見返貳朱金壹兩貳分○古壹分判五拾兩○三兩古貳分金○保字金十一兩○貳朱金八兩○百七拾五兩上京御入用八百九拾兩三分壹朱此内市三郎分凡貳百兩追ふ調之積
- 六日 晴 土屋大膳亮來る左之短刀并鑿ゆつり申候
- 七日 くもり 横濱を書狀來る
- 八日 雨 北條松之丞來る○謹吾 御上洛御供被 仰付之
- 九日 晴風 謹吾 御上洛御供之義足痛に付御斷申上るこれは養父左近心配故也
- 十日 晴 窪田次部右衛門其外來る

黄

太郎出立

- 十一日 晴 此節太郎發足前に付手傳等として來る舊臣には富塚順作松村良右衛門其外良右衛門は日々來り或は止宿也順作關糺松村賢之丞屢來る其類日記有之
- 十二日 晴 太郎明日出立に付人々參る供として罷越候もの用人土岐虎之介水戸人小嶋熊次郎江戸人士 伊州馬壹疋鍵持壹人兩かけ持貳人馬之口貳人草履取壹人以上十一人と覺へし先觸にて可糺 上よりは人足十人馬貳疋被下候旨之御達急御出立となり半減に成元來二月廿七日之被仰出廿一日と成又俄に十三日となりたる也○見立之入々 御城を御先之參に付内藤幸三郎原田市三郎新家直太郎參り候はかり也
- 十三日 晴八ツ時を雨又晴 今日 御發與無滯相濟九ツ時前後に承る
- 今日を松村良右衛門日々參る侍壹人井上信濃守を借用當分之内也
- 十四日 風雨 來人なし
- 十五日 晴風 來人なし

公方様
宮根御歩行
童謡
マクナイキ
貸遣す

- 十六日 くもり微雨 富塚順作来る
- 十七日 曇 松村良右衛門一旦歸宅之上再ひ来る石川獻藏来る○井上信濃守の書狀来る返事は追お遣候積
- 十八日 晴 來人なし
- 十九日 晴 原田市三郎横山庄三郎畑山梅三郎来る
- 廿日 くもり 富塚順作来る
- 廿一日 くもり 來人なし
- 廿二日 くもり 市川弁吉来る十七日附に太三郎三嶋宿當直の書狀来る 上様殊に御機嫌にて小田原宿の箱根を御越中山の御立場まで御歩行之由申来る此節江戸はやりうたに何ノソレわけはないと云也 御歸城の御瑞歌にいたし度候
- 廿三日 くもり 井上信濃守弁當に來る○舊婢はま來る
- 廿四日 くもり又晴 戸田謹吾來る三兵タクナイキ貸遣す

外史貸遣す
三月十七日
返却
孫子返却

- 廿五日 くもり 石川獻藏來る○良右衛門を石川屋に遣す
- 廿六日 くもり曉雨 來人なし
- 廿七日 くもり又晴○田村與助太郎之悦として上總より出府候お止宿也若園要人來る
- 廿八日 くもり 關糺來る外史五冊貸遣す孫子貳冊返却いたす
- 廿九日 雨 來人なし
- 晦日 風晴 來人なし

土左日記

座右日記 (文久三年三月)

百三十五

- 三月朔日 晴風 來人なし
- 二日 雨 來人なし○山本新十郎妻病死に付茶遣す
- 三日 雨 上巳の御禮もあらず家々に門を開き不申候
- 四日 晴 來人なし
- 五日 くもり又微雨 富塚順作來る○良右衛門歸宅○市三郎へ土左日

記貸遣し候二冊

○六日 くもり又晴 久保田治部右衛門來る同志之もの共三百人相集候
ゐかな川の地理内見分として參候由右に付三月四日河内守殿御渡之御書
付寫一覽いたす此度神奈川表に英國船軍艦數艘渡來重大之事件書翰を以
申立來ル八日迄に御決答無之候は、船將之職掌を盡し可申旨申立候右に
付不容易義應接之模様可開兵端も難計候間抛身命多年之 御恩澤を
相報し不覺之心懸無之様厚可被心得候尤 御留守中之義にも候間猥に動
搖を不生様家來末々迄可被申付候右之趣万石以下之面々不洩様可被相
觸候 三月

○七日 くもり又晴 太郎旅御扶持方受取十貳兩三分富塚順作來る内藤
幸三郎齋藤源藏來る同人は一戰始り候は、小兒を可引受旨申之奇士に小
兒を詫し候例有之に付頼候旨申聞相返す○高山老婆に八拾兩返却○太郎
御供先岡崎宿之書狀來る

英

英

止才

○八日 くもり又晴 箕作阮甫が海國圖志廿ノ卷返却有之候○異變之節
馬に乘度旨申候處いか様ともいたし候而差支いたす間敷旨申聞候例之義
烈感候間目錄二百疋遣す○英夷 御歸城之上御決答可有之候得共夫迄之
間異變難計勝算無之候とも攘夷之方に 御決之旨被 仰出候に付銘々不
覺之心得無之様御目付之達有之候○此節町人共荷物など左方運候もの
有之候由○相撲取四百人有之即刻可罷出旨之受町奉行へいたし候由
○九日 晴風 窪田千太郎來る同人任申揮毫いたし遣す○箕作阮甫不快
尋として西洋酒遣す
○十日 雨 新家鍔作玉落十三兩受取○戸田謹吾來る○主税之助に甲冑
之書物單騎要略止才類纂貸遣す
○十一日 雨 明珍方の冑貳ツ前建物直しに遣す鍔炮師へケール四挺
直しに遣す
○十二日 午後快晴 石川壯次郎來る富塚順作同斷

義人石川屋
庄兵衛は實
名昌喜

○十三日 くもり 知行所村に百姓共呼出遣す上吉田村に金三十兩貸遣す○市三郎おのふ書狀來る○おさと紀州奥の參る

○十四日 曇 神田旅籠町石川屋庄次郎來て助宗と銘有之貳尺八寸之刀石州物在銘平つくり貳尺五寸之刀并菓子一折くるに付逢遣し禮申述る右は御勘定奉行に魯西亞一條に長崎の參候節當庄次郎父庄次郎申聞候は同人父石川屋庄兵衛事兼る異國之事に心配候若事有之候は罷出候積に二刀を造置候に付家來に爲指場所の出吳候様と願也御役中に付斷候相返し候處今般之騒動有之候に付差越たる也右之刀は持參候陣中の臨候積也

○十五日 晴 長田の遣し候養女つる昨日來る今日罷歸候○武州上吉田村急仕立飛脚差立候百姓共呼に遣す箱森村古橋村にも急使差立る上吉田村には金三拾兩願に付貸遣す

○十六日 晴 戸田謹吾來る○日本外史壹の五迄返却

○十七日 くもり 昨夜本郷金助丁邊出火池之端迄延燒之由

○十八日 晴 井上信濃守に及文通刀貳本同人家來に渡し遣す○久保田次部右衛門原田市三郎富塚順作來る○山本新十郎の鯛其外之交肴くれ候今般之一件に付知行所の申遣し候處百姓共銘々一刀を帶候即坐にかけ出候夜通參候由に追々十人來る肴代等遣し候

○十九日 晴 地震強し○横濱の敷山篤次郎來る洋酒一壺くれ候内藤幸三郎來る

○廿日 くもり風 新吉郎爲立退之義井上の申遣す存意無之旨申來る○石川獻藏來る

○廿一日 くもり風 畑山老母來る○井上の石川屋之事申遣す

○廿二日 晴 昨日京都の宅狀來る○淺野備前守來る

○廿三日 晴 富塚順作來る野田おしけ方の金三百疋遣す

○廿四日 雨 來人なし

○廿五日 くもり 高村俊藏来る菓子くれ候英賊いさゝか静なるけしきに付小兒を知行所へ遣事少々見合候

○廿六日 晴 市川弁吉原田市三郎来る○公方様再ひ京師へ暫御逗留被仰出候由也

○廿七日 雨 知行所之もの共七人歸村申付る○太郎方之壹封横山九十郎を以差立る

孫子返却

○廿八日 晴 健之丞々孫子三返却○野州箱森村名主守次郎外貳人古橋村名主源左衛門外四人着いたす右に付下吉田村之もの共殘居候四人歸村申付候而追而箱森外壹村之もの共と可交替旨申渡○下吉田村并箱森村外壹ヶ村共駈附候節酒代壹人壹朱宛遣す下吉田村之もの共には歸り之節金貳分道中手當貳朱ツ、遣し村役人共には別段品物遣す玉出之とくり塗盃など也

知行所取扱

○廿九日 快晴 太郎方々廿一日出之宅狀来る其内に廿日之被 仰出に

一日歩行積

攘夷之 詔御奉戴に付早々拒絶之應接に及ひ外夷承服不致節は速に打拂候旨被 仰出候間一同厚相心得可被抽忠勤事と有之候而驚歎せり夫には殊更に早く 御歸城無之候而は不相成いかなる事にも御滞留に候哉○今日試歩甲冑にて鏡炮を擔ひ土圭短劍十三日之内に二万二千歩也一間三歩之割に七千三百三拾三間余也壹町六十間割に百貳拾貳町余也三拾六町壹里に三三三拾四丁余也短劍壹分に付九丁四十間成晝夜等分六拾歩に一日之歩行拾五里六分と成今右に付試積一日三度之食事壹分五厘ツ、に而四分五厘五リソツ、の足休三度に而壹分五リソ大小便之間凡壹分七分引之殘五十三歩と成これへ九四をかけ四百九拾八丁貳分と成三六に而割十三里六分七リと成夏至之頃には貳拾貳里九分余之歩行と成○晦日 晴○昨日井上信濃守之文通横山庄三郎に爲持来る同人夜分再應来る○井上信濃守來る

○四月朔日 風微雨 横山庄三郎來る○四番之宅狀京都來る
 ○二日 雨 來人なし原田市三郎を肴くれ候○石川屋庄次郎來る井上信
 濃守懸安藤源吾左衛門懸去年十一月出訴本銀町三丁目幸兵衛こと申聞候
 ○三日 晴 箱森古橋兩村之名主計隱宅之庭に呼出し紀州を參たる菓子
 など與へ候
 ○四日 晴○昨日横山鐘三郎松平上總介來る鐘三郎には太郎方への書狀
 たのみ遣す○市川弁吉來る豊田彦次郎之書物壹冊かしくれ候
 ○五日 雨 松村健之丞來る孫子五冊貸遣すそれにて皆濟也
 ○六日 雨 永田義次郎來る
 ○七日 雨 昨夜強雨中麻布善福寺焼失之由異人宿寺に付必怪火なるも
 しるへからす○辰五郎來る
 ○八日 くもり 芳賀榮之助石川俊藏來る同人くれ候 勅諭 三月十七
 日於 御所關白殿一ツ橋に御渡 英國渡來に付關東之事情切迫に付防禦

御滯京御達

之爲 大樹歸府之義尤之譯柄に候得共京都并近海之守備警衛策略之折柄
 君臣一和に無之候は不相叶候處 大樹關東へ歸府東西相離候は自然
 間隔之姿に相成天下之形勢不可扱之場に可至とも難申當節 大樹歸府之
 義は於 叡慮不被安候間滯京有之守衛之計略厚被相運奉安 宸襟候様
 思召候英夷應接之義は浪華湊下に相廻し拒絕談判可開兵端之節は 大樹
 自出張万事指揮候は 皇國之元氣挽回之機會可有之 思召候關東防禦之
 義は可然人躰相撰被申付候様御沙汰之事

諸侯御委任之勅

三月廿三日 大樹歸府之事情段々以 勅諭被 召止候事
 先日御沙汰被達候通 將軍職万事是迄之通御委任に候就は諸大名以下
 守衛万端指揮於被致は 御安心に候事故に仍候は、
 御親征も爲遊度程之 思召に候事三月 畏 御受奉申上候
 御諱 三月廿三日關白殿を尾張前大納言殿に御渡 大樹歸府之義再應被
 相願候得共歸府有之候は如何様之變事出來候も難計左候得は實以一大

御滯京之勅

水府御歸府江戸之事御引受

事之義故深被腦 震襟候間天下之爲且は徳川家之爲をも深被 思召候義
 故今暫滯京有之攘夷基本相立 叡旨 御貫徹人心安堵之場合に至り候
 被奉安 震襟候様周旋可有之御沙汰之事 公方様御滯京之義御請被遊候
 に付亦は爲關東御守衛下向被 仰付候間早々出府防禦筋手厚に相心得自
 然英夷開兵端候節は盡力決戰有之候様御沙汰之趣被 仰出之右は三月廿
 三日水戸殿の御達○用人士岐虎之助京より中歸いたし候る書狀其外差出
 す同人は三月廿八日出立に於今八日八ツ時着也
 ○九日 くもり 井上の書狀遣す返書來る再ひ書狀遣す○横山庄三郎方
 の書狀遣す返書來る

浪人鼻首

虎之助出立

○十日 晴 原田市三郎來る
 ○十一日 晴 昨日兩國橋に鼻首貳ツ有捨札之趣に於は浪人と号し市中
 を亂妨いたし候もの之由右に付誅戮いたし候旨也
 ○十二日 くもり 今日六半時虎之助京都へ歸候兩かけ一か也刀壹本部

村方交替

浪人共之騒動

其外太郎差料にクサリ繩と申刀爲持遣す脇差は不遣候
 ○十三日 くもり 穴藏修復いたす清兵衛來る
 ○十四日 晴 昨日下午吉田村之もの共七人着に付例之通酒代壹人并道中
 の手當遣す野州箱森古橋兩村之もの共は歸村申付る名主守次郎源左衛門
 は別段アメリカ皿遣す小前一同銘々金貳百疋ツ、遣す○昨日着之下吉
 田村之もの共は酒料遣すこと前之如し道中難用も遣候
 ○十五日 微雨 井上の新家遣したるに稽古日なれと劍術なしとて歸り
 來る○井上十三日夜俄に同役淺野備前守方の參候る其後十五日八時に至
 り候得共歸宅なしと云稽古人も不來よりて其ま歸候由也○去ル十三日
 淺草に於久保田組本所組いつれも十人余之由行逢たるにクホタ組之もの
 之内か立歸候る本所組之浪人頭を脇差に於突殺候由被殺候ものは清川八
 郎と歟申たるよし也其外不相分候○宅の參候肴や下女へはなしに日本
 橋に甲冑の士鎧を持居候ヲ多みたるよし或はアへ伊豫守人數とか甲冑に

本所浪人屋敷を取圍候其否次第に焼拂悉く殺し可申と之勢しかるに浪人中になか間の浪人十三人をしはり差出候由或は傳通院のヤリ拔身を持銃炮は長持へ入候人々夥集候由其外に右之人々はアへ伊豫守アへ人数也とも申候追承れば傳通院の勢揃いたし候由に申觸候一且神田橋邊へ集り其人數俄に馬喰町又は本所浪人屋敷の押參候由也浪人召捕方大名は酒井左衛門尉阿部主計頭相馬大膳亮松浦肥前守と之咄也評定所に十五日夜左之通岡田盟武田本記淺岡庄司小林武八郎松永縁金子武男淺井六郎林源藏津田左司馬上林藤平萩野良作伊藤龜之進小倉大平和田堯藏以上十四人一通り尋之上浪士取扱鶴殿鳩翁中條金之助家來引渡田中九十九大野喜左衛門中澤良之助古渡喜一郎羽倉忠作小倉宗作稻熊刀之助寺田忠左衛門以上八人は右同斷家來へ差返す村上俊五郎和田理一郎白井庄兵衛石坂周造松澤良作藤本昇以上六人俊五郎土方聳千代家來和田理一郎松澤良作は大關肥後守家來へ白井庄兵衛藤本昇は松平出雲守家來の御預

水戸殿撰夷御目代

四月十四日豊前守殿御渡 水戸中納言殿爲關東守衛下向被 仰付候に付防禦筋之義 大樹目代之心得を以指揮可有之候先祖以來格別勤王之家柄先代之遺志致繼述闡藩一致盡力防戰可奏 夷狄掃攘之成功候様 御沙汰之事

右之通於京地被 仰出候間爲心得万石以上以下之面々可被相達候 四月同斷 水戸中納言殿此度御滯京被仰出候に付爲關東御守衛御下向且從 御所被 仰出も有之候事故外夷御處置振之義御委任被成候間曲直を明にし名義を正し御國威相立候様御取計可有之旨被 仰出候に付は尾張大納言殿并老中にも御相談有之候様被 仰出候 右之通被 仰出候間爲心得万石以上以下之面々可被相達候 四月
 ○十八日 雨夕くもり 佐々木三藏外壹人の夏物京地の相廻候は、來る
 廿五日迄に馬喰町御代官の可相廻旨申來る
 ○十九日 くもり 謹吾の銃炮來る直に遣す

海道附替海岸町家取拂

○廿日 くもり 窪田次部右衛門妻方の酒井煮肴を添候を尋遣す
 ○廿一日 晴 井上の書狀遣す○市三郎の孫子貸遣す古事紀傳二冊同斷
 ○四月廿日松平豊後守殿御渡追々被仰出候趣も有之候に付而は海岸爲防禦東海道品川宿を藤澤宿迄道附替人家引移候分も可有之且品川宿を芝邊海岸附町々見分之上場所に寄御警衛筋差障候分は家作取拂之義も可有之候間右宿町普請等之義は見合候様可致候右之通海岸附町々の可被相觸候事

○廿二日 晴八十度 石川獻藏來る
 ○廿三日 晴 四月廿二日豊前守殿御渡之御書付 今度英國軍艦渡來之主意曲直を明にし否義を正し隨而鎖港之談判可及候間右談判中は家來末々迄無謀過激之所業無之様能々可申付時宜に寄戰爭と相成候節は一心同力御國威相立候様銘々覺悟可有之候
 ○廿四日 くもり 來人なし京都へ夏物を出す木村董平を受取來る

○廿五日 くもり 老拙誕生日に付酒食をつくり候而家來并知行所之もの共迄にも遣し候
 ○廿六日 微雨 岡田備後守來る筆をくれ候
 ○廿七日 晴 昨日宅狀到來
 ○廿八日 くもり 下吉田村之もの共交替井上藤左衛門來る信州を返書持參○横山鐘三郎來る井上の書狀たのみ遣ス○謹吾之夏物戸田に爲持遣す

○五月朔日 雨 昨夜忍ひにて井上の參る○來人なし
 ○二日 くもり夕雨 原田市三郎淺田宗伯來る
 ○三日 晴 來人なし加納屋をあつらへの酒四樽來る
 ○四日 晴 來人なし試歩二万五千歩并十五丁○蝦夷を書狀來る
 ○五日 くもり 昨今之内異人共芝邊燒拂可申旨之町々の内觸有之候由

右に付井上の實事承に遣す横山もしや存候哉と爲念遣す戰爭之場所いつれにいたし候哉と窪田同道之積申遣す○井上小一郎を差越持寄刀遣す此節から死を以御奉公いたし可申候敬齋も此節は被仰付候は、いか様なる事にもいたし候積之旨及挨拶候○木村董平來る松鮪くれ候うつり遣し候○京都へ狀を出す

○六日 くもり折々雨 久保田の書狀遣す受取來る○自分事非常之節隱居には候得共御報恩之ため罷出度旨申立度候處隱居其上太郎留守に付井上信濃守を以若年寄酒井飛彈守殿の申立貫候處至極尤に御聞受今日も若老壹人も御登 城無之候得共非常之節即今も難計候に付飛彈守殿心得被居候に付勝手次第非常に望候は、出張不苦闇老方にも出勤次第具に可申上と之事に付爲心得其旨大目付酒井但馬守にも申聞致候旨信濃守を申越○七日 晴 辰五郎馬牽來る故に井上之本屋敷に參乘且門前乘いたす隱居以來今日をはしめとす此節門外不出にて慎居候は、大切之御用難成故

也

○八日 くもり 昨日くら宿の太郎御役料之案帛來る今日爲持候而御小納戸之宅の使者に遺す○英賊品川海の乗込候由に付忍ひにて參る御臺場を道邊に當り壹里余と申候事もや有之候而分明には不見井上信濃守方の參る

○九日 くもり 窪田治部右衛門方の參る同人の隨身之浪人共に逢申候歸り懸内藤豐太郎一橋殿の御附添に上京歸府之怡として參る

○十日 くもり 内藤豐太郎齋藤源藏來る○小兒不快に付淺田宗伯來る○七ツ時過平岡丹波守殿御家來山田鎌藏若年寄御連名にて明十一日四時登 城候様御達書持參也右之もの當時之御振合承合候處御受として罷出候に不及候受書計に宜候旨申聞候に付御受書家來大橋主税を以御宅の差出す右に付明日登 城之心得方承候に付病氣に候は、當御宅御目付の其旨相達候旨爲答候事 御當番御目付衆川路敬齋今十

一日四時登 城可仕旨若年寄御差圖罷出申候五月十一日 川路敬齋 口上覺 及老年耳遠に相成申候因起坐折々不自由之義御座候 齒拔候言舌不分明に御座候 右之趣爲念御斷申上候事

○十一日 晴又くもり 五ツ時過之出門也小普請方の參る御目付へ達書貳通共前記之通土屋民部の遣し候芙蓉之間に 御老中御列坐に 外國奉行被 仰付之勤候内三千俵被下之御勘定奉行格被 仰付之井上河内守殿 仰付被傳候廻勤御老若共同役には參り不申候御右筆御同朋頭大小御目付御勘定所御留守居吹聽例之通也

○十二日 晴 羽織袴に 自分心得に 染かたひら着用いたす○太郎方の書狀出す○改名相願候處伺之通たるへき旨金阿彌を以月御謝禮御渡

○十三日 晴 例刻登 城○刑部卿殿の懸御目候了簡書差上申候○刑部卿殿御逢に付淺野伊賀一同罷出候井上河内守殿も被出候七ツ半時退散○十四日 くもり 例刻登 城○英賊之義に付同役其外談判之上に 酒

井飛彈守殿の柴田貞太郎一同罷出申談候處悉同意也其旨一橋君の申上吳候様申之に付御用部やの罷出候一橋君の兩人を存意申立ル○水戸殿の懸御目候○退出薄暮也

○十五日 くもり 例刻登 城○圖書頭殿の懸御目候一橋殿今日御登城御中暑に 無之候由以外也押も御登 城に 可然旨申之且親藩の罷出候節は同道之人無之候は以前を決る不仕旨申之候處圖書殿御列とも御談之上御同人御口上に 御病氣見舞に可參と之事に付一橋殿の參り御用人平岡圓四郎に謁委細に申談登 城之上御用部やに 其旨圖書殿の逐一申立候○水戸殿御逢有之候

○十六日 晴八十七度之暑 例刻登 城○圖書頭殿の懸御目候○跡部山城守逢被申候○松前伊豆守と京師之義申談候○久保田次部右衛門原田市三郎來る

○十七日 晴九十度之暑 昨日を御請にいたし候上野 御宮の參拜歸

り懸前田夏かけ高橋古太夫箕作阮甫大越貞五郎方の參候夫々登 城○御用部やの罷出候事三度登 城中一橋殿の御老中方の御使に參る御用人久松壯次郎中根平十郎に逢候御不快御容躰相伺候其次第御老中方の委細申上候

○十八日 晴 平岡圓四郎の及文通○圖書頭殿の左の書面之意申上る攘夷之義不相成旨尤と思召候故御引被成候に可有之不尤に候は、諸役人を御叱り御沙汰有之可然候これは水戸一橋と之引合迄也京師之御動靜を御覽候一策を御施し可被成歟夫迄應接は御見合に候哉如何其外及御談判候○平岡圓四郎方の及文通候處一橋へ參殿無之に付長根長十郎方の申遣す其旨圖書殿の申上候

○十九日 晴九十二度之暑也○長根長十郎方の及文通候處先年老公之御書は御燒捨に相成候旨申來る○例刻登 城○窪田治部右衛門來る

○廿日 終日雨 例刻登 城

○廿一日 晴 例刻登五ツ時六十八度 城詰番也

○廿二日 くもり 例刻登 城○御用部やに豐前守殿因幡守殿飛彈守殿御逢圖書頭殿御上京之義一橋殿御承知無之義に付行違之始末一橋殿の參り申譯いたし候様一同被申候得共右躰之義外國奉行可取扱筋に無之旨再應申上候處尤に御聞受併豐前守殿御用多に付可參旨に付左候は、御同人の家老の一應御沙被爲達候汰脱カ其余之義を一橋殿の參り可申上旨申立候處其通可取計旨に付即刻一橋の參り用人中根長十郎の謁其旨申達委細御口上承候再ひ登 城右之御方々の尙又申立候

○廿三日 晴 例刻登 城○石川獻藏來る○夕方大越貞五郎來る土産として金貳百疋くれ候

○廿四日 晴 例刻登 城○御用部やに豐前守殿因幡守殿飛彈守殿御逢候一橋の御使之義被命之右に付一橋の參り用人平岡圓四郎の謁候委細申談候御答之趣登 城之上有馬遠江守殿御夜詰後部屋に被居候間參

改印御届

候而委細申上夫を豊前守殿御宅へ出る御居間の御通し御逢有之委細御返答之趣申上候○昨日を印形相改太輪に而聖謨之篆字也右之趣御用番の御届書上ル夫々の印鑑出之

○廿五日 晴辰刻七十一度○一橋殿の御答書之義に付不見聞旨太郎の及文通

○芙蓉之間におゐて御誕生御祝義之御酒并餅頂戴之今日殿中麻上下染帷也○若年寄御部やの出候而昨日之義委細飛彈守殿に申上る

○廿六日 晴風八十五度 一橋御用人村山總太郎を文通有之右之趣書面を以豊前守殿飛彈守殿に申上候而總太郎の及返書返書は豊前守殿飛彈守殿の再應まで入御覽候

○廿七日 くもり 窪田治部右衛門を之書狀に而浪人河野音次郎谷右京來る面謁兩人共大炮之事を申來る音次郎は岩槻在右京は丹波之もの也と云○例刻登 城若年寄御部やの出候而長州一件之存意申參る

○廿八日 晴 例刻登 城○河内守殿御逢候而亞虜之菊地と應接書自分

五月召捕候
高野保太郎
大葉右作美
篠原勝次郎

一橋の持參之御沙汰有之候及御斷候家老に被仰付候○太郎を之書狀來る自分今般之被 仰付吹聴後初也○土岐虎之介を之一封來る凡太郎同様之趣意虎之介は一度功を立候は、早々隱居可然旨申越ス○松村量右衛門の金三百疋ツ、くれ候土岐虎之介の同斷富塚順作へ金貳百疋遣し候

○廿九日 晴 例刻登 城○飛彈守殿に懸御目候○淺田宗伯來る○金阿彌を鮫之代二十兩來る

○晦日 微雨 例刻登 城○箱森村之もの共用水出入之義申立ル○殿中可記義無之

○七月朔日 晴又雨折々也○在宿○當月月番也前々日に申上に相成○今日西洋書一箱かき共に五月之月番を下手紙に而送り來る返書遣す西洋學者共日々之當番書來るこれは一昨日 御殿に而受取

○二日 晴風 例刻登 城出かけ小栗豊後に參る

○三日 雷大風○赤羽根邊を火曉七ツ時五ツ半時迄も不鎮火其内打交に相成候に付直に登 城西丸飛火にて炎上也御本丸殊に風筋不宜御休息之御屋根裏を飛火にもえ上り候に付人足共等は不及申 殿中詰合之も其悉消防いたし幸ひに鎮火河内守殿を今日一同骨折之旨御目付設樂彈正を以御沙汰也

○四日 晴 例刻登 城一橋殿御 登城無之事に付豊前守殿に存寄申上候

○五日 晴 土用入に候得共相替候義無之候當番也○窪田次部右衛門來る同人義に付存寄之趣有馬遠江守に申述る

○六日 晴 例刻登 城○亞人差出候書翰伊豫守を廻し來る即刻翻譯方之もの共呼出翻譯申付候則詰番に御老中方に申上候○袴塚生來る

○七日 晴 例刻登 城○御證文相渡る○登 城前に人々來る○窪田次部右衛門蝦夷地在住被 仰付之旨申聞る

○八日 晴昨夜雷雨○窪田次部右衛門來る右之義大之進井庄次郎にも申談次部右衛門方にも申遣す

○九日 晴 例刻登 城○窪田次部右衛門事に付鈴木大之進咄有之候○富塚順作來る

○十日 晴 例刻登 城詰番也○拂夷去ル五日長州にて戦争之申立有之候

○十一日 晴 例刻登 城金阿彌へ鮫遣す

○十二日 晴風 例刻登 城○因幡守殿に懸御目候○菊池伊豫守明日出立

○十三日 晴風 例刻登 城○同役御人撰之義に付存寄書豊前守殿に御直上ル右之趣遠江守殿にも申上ル

○十四日 晴 例刻登 城○菊池伊豫守御用有之御呼返し草加宿を歸ル○敷山篤次郎并辰五郎明珍來る

○十五日 晴 例刻登 城○昨日神南川の異人之書翰貳通差越翻譯として箕作秋坪呼寄取調爲致申候其旨今日御懸河内守殿に申上る

○十六日 晴 例刻登 城○豊前守殿に懸御目○四半時頃今朝 公方様品川海迄軍艦にて 御歸之由引續濱迄被爲 入候由無間も一石橋迄御船に在 御歸之由追々注進有之 殿中服紗麻上下に成御老若并芙蓉之間御役人御出迎に出御老若は下乗橋迄寺社奉行はしめ大手之方上坐に在百人外張番所前の平服 公方様は御歩行なり○御船故御供をも被爲減候も御小性御小納戸はつかに六人被召連其外は講武所等之人々多く被召連候十三日夕方に大坂にて 御乗船紀州かた浦の御船を被寄候も召上り物等有之候由和歌のうらへにも被爲入候由十六日朝は濱迄 御歸り 御歸城は八時半時也中之間に在御老中豊前守殿に謁御機嫌相伺候退出歸宅薄暮也○窪田次部右衛門富塚順作來る○小笠原圖書頭 思召有之御役御免被成候旨達し有之同人は大坂御城代の御預之由也

○十七日 晴 例刻登 城○和泉守殿に懸御目候○材木代淺野中書に遣す

○十八日 晴白雨 例刻登 城惣出仕染かたひら麻上下中之間に在恐悦申上る廻勤なし○酒井雅樂頭御老中被 仰付之上坐たるへしと之事右之趣芙蓉之間に在役々の御達有之候○御用部屋に在一橋殿に懸御目御老中方にも申上る

○十九日 晴白雨 例刻登 城○御用部屋の出候も和泉守殿河内守殿御尋之義夫々申上る○評議物有之三奉行大小御目付一同御白書院に寄合に在異國に申達方之評議いたす

○廿日 晴 見廻り日に付宅調いたす

○廿一日 晴 例刻登 城詰番いたす○富塚順作石川獻藏來る

○廿二日 晴 九字時和蘭 コンシユルセチラアール
ボルスフルーク 脱アルカ夫の登 城委細豊

前守殿因幡守殿に申上退出

○廿三日 晴 和泉守殿を急使に御逢之義申來る即刻乗切に參る遠江守殿列坐に御尋之義有之存寄申上る右之趣遠江守殿一同一橋殿に可申上と之御事に御同所に參る御直に存寄等申上候夫を登 城十三卿等之義に付存寄御用部や御列坐之處和泉守殿に上る○夜九ツ時前河内守殿を急使來る即刻出宅罷越御逢有之曉七ツ時歸宅

○廿四日 晴 例刻登 城○明廿五日五ツ半時御城に罷出誓詞可仕旨之御書付豊前守殿金阿彌を以御渡

○廿五日 晴 例刻早メ横麻ちみ紋附に登 城○柳之間に誓詞豊前守殿御見届大目付松平對馬守罷出る○同役村垣淡路守御作事奉行被仰付之田村肥後守同役被 仰付之洋書調所頭取也

○廿六日 晴 例刻登 城○横濱鎖港之義難相成旨一同河内守殿に申上る○瑞生國條約之義御斷難相成旨之外國奉行評議書遠江守殿に上る

○廿七日 晴 例刻登 城○豊前守殿因幡守殿遠江守殿に懸御目候○戸

藥酒方

井上差扣

塚西涯に逢申候同人傳授コレラ酒キナゲンチアナ青橙皮各一匁酒八匁ビシへ入日なたに出し置こと三四日にて用ゆ○昨夜井上信濃守を書狀來る同人去ル九日 思召有之差扣被 仰付候旨大坂表を申來る右之趣同役衆に申達小笠原攝津守を御目付土屋民部に問合之處差扣伺之書面不及差出旨挨拶有之候旨攝津守申聞る

○廿八日 晴 例刻登 城○和泉守殿御沙汰之品も有之候かな川鎖港之義三奉行大小御目付と及談判○和泉守殿御沙汰に寄明廿九日かな川に罷越佛夷と應接之義申上ル遠江守殿御沙汰之始末かな川奉行應接之趣と符合いたし不申候間其旨遠江守殿に御目付土屋民部かな川奉行長井五右衛門一同罷出候及談判候

○廿九日 晴 明六ツ時前之出宅に先乘同心召連候横濱に參る川崎宿に参行懸り之廉に万年屋に立寄晝飯給夫かな川に着十一字壹步前也暫休息候横濱運上所に參る奉行とも及談判同所に弁當替に食事市

店を取よせもらひ給申候佛虜アトミラール旅館に參候る應接六字貳分の夜五ツ時まで相懸り夫を旅宿に引取往返共船也

○七月朔日 晴 かな川本陣へ旅宿○江戸に應接書要文拔書内狀共相添乗切に差立申候

○二日 晴 七ツ時出立に乘船四ツ時品川に着夫を登 城○御老中方懸御目品々存寄申立る○長州に御使可被遣旨に付存寄申立る

○三日 晴 例刻早メ登 城佛夷御返翰之評議○御城河内守殿に參る○御用部屋に屢罷出候申上候○太郎今日歸着登 城之上歸宅四ツ時也

○四日 晴 例刻登 城○横濱に參り佛人と對話可致旨之御沙汰に付歸宅之上夫々申付御船拜借被 仰付候旨に付御軍艦所に參候處風惡敷候る歸宅

○五日 晴 六ツ時御軍艦所に相揃同役菊池伊豫守御目付設樂岩次郎土

太郎歸府

佛蘭西人

アトミラア

ル

公使

ドロンテベ

レクミラア

ゼウレス

屋民部也風惡敷に付陸通行に横濱運上所に參る六字二分に佛夷館に參り應接之上旅宿に四ツ時歸る

○六日 晴 六ツ時出立に川崎宿手前候處佛夷面會之義申聞候旨神奈川詰之ものを申越に付引返し直に横濱に參り夫を佛夷館に參候る佛ミンストルセテラールに及應接候る夜四ツ時歸府也

召出御答

○七日 晴雨折々 五ツ時染かたひら麻上下に登 城○御用部屋に罷出伊豫守は不快に付不能出民部岩次郎一同也應接之次第委細申上る○水戸殿御逢有之松平左兵衛督も罷出長州こくらの出張之義品々申上る○御前 召出有之候る横濱之始末御尋民部岩次郎も一同也委細申上る○台恭院様已來 御四代之 召出相勤難有さて又此おやちに相成候ものを三千石被下恐入候一俵丈之御奉公も不申上候故に 御意に障候も申上度義有之候元來 上は紀藩を 公方様に被爲 成候は 御高運とも可申候得共乍去此六ヶ敷世之中に被爲當は恐入候義に有之その衰可申様は無之候

處何卒御歳四十歳に被爲 成候迄に此天下を泰平に被爲成不申候は
御先祖様の對せられ相濟不申候般の天下七百年保ち候滅候迄も威力有
之候は賢聖之君六七興り候故に御座候いかに六ヶ敷天下に候とも人君之
心ツにて起候義いにしへより其ためし不少候こゝに罷出候御目付いづれ
も年若に候得共往々一廉御用立 上之御四十に被爲 成天下を御挽回之
御輔翼を可仕候とかくに御役相應偽無之ものを被差置不申候は天下は
治り不申候私相考候に 上に恐悦御樂を被遊候様と申候義は不申上候
天下之御爲に品々御苦勞被遊候御苦勞中々正理之御樂を御樂被遊候様
と奉存候それは目出度万々歳御世被爲知召候とも一時も御心たるみ無之
被遊候様奉存候人は修行に上達仕候講武所之ものとて別段之ものには
無之只數をかけ候修行仕候より人に立まさり候義に御座候何卒 上も
天下之御修行被爲在度と奉存候元來今日之一件なと不容易品に付 御直
に評議之品御聽被遊候可然ものと奉存候其外品々申上候處 御意に評

議有之候事相知不申候評議あらは申聞かせ候へ其節々 出御可被遊と之

御事也○今日御用部屋に 出御有之評議被爲 聽候

○八日 晴折々白雨 例刻登 城○御用部屋に罷出屢存意申上候六ツ時
過歸宅

○九日 雨 紅葉山 御宮に御參詣可被遊處天氣合に付御延引例刻 登
城可致處風邪に付其旨申遣す

○十日 雨 不快に登 城不致斷之義且引込御届之義石見守方に爲問
合遣す

○十一日 朝 午後風雨 紅葉山 御參詣無滞被爲濟候在宿○市川丈助
來る

○十二日 風雨 不快に付在宿○市川弁吉來る

○十三日 くもり 例刻登 城○和泉守殿に御同人御父越前守殿御行狀
之趣相記候書付上ル○英夷薩州に參り同國家來島津三郎東海道川崎かな

川の間武州生麥におゐて英人不禮有之候由を以切殺候に付償金之義に付
 英虜之軍艦薩州の参り候而及懸合其末戦争に及ひ候一件に付評議有之候
 ○十四日 晴 未明より出宅に而兩菩提所の参る四ツ時 御城より御老中方
 再御登 城之旨申越候に付即刻出宅八ツ時歸宅
 ○十五日 晴 例刻登 城○長崎拜借之書面大久保豊後守の遣ス○横田
 庄三郎來る
 ○十六日 晴 例刻登 城○和泉守殿の懸御目候
 ○十七日 晴 例刻登 城○薩英戦争之義に付御老中方より了簡御尋有之
 候河内守殿懸にて一同の御尋也自分出候而御受申之○齋藤源藏來る面
 謁石川獻藏富塚順作來る○虎之介知行古橋村用水出入一件に付彼地の参
 居候處今日歸府○太田備中守より直書來る
 ○十八日 晴 例刻登 城出かけ太田備中守隠宅の参る内話之趣有之候
 ○英夷之義同役一同罷出候而御老中方より申上る

上書
右に付防州
答

○十九日 晴 例刻登 城○松平左兵衛督の逢候而談候義有之候
 ○廿日 晴 例刻登 城○金港開鎖之論一同に而御老中かたの申上候
 ○廿一日 晴 水瀉に付在宿○河内の拵下る刀直次ナハサリ ロキサシ 家○石川
 獻藏來る○河野某來る其外逢候もの三人○淺田宗伯之書狀返書遣す
 ○廿二日 くもり 増上寺の 御参詣に付詰番之外宅調に付在宿○松村
 忠四郎富塚順作來る
 ○廿三日 雨 例刻登 城○出懸ケ松平左兵衛督方の参る
 ○廿四日 雨 例刻登 城
 ○廿五日 折々雨六十五度之冷氣に成 例刻登 城
 ○廿六日 晴 例刻登 城○周防守殿の懸御目候而 上御文武之御修行
 其外之義申上候書付壹冊口上相添上る
 ○廿七日 くもり又雨 例刻登 城○周防守殿の存寄之趣ケ條書にいた
 し差上る御同人被申候は昨日進達之書面一覽候處尤之筋に付御同列衆の

も相廻し候上にあ 上之御覽に可入旨被申候

○廿八日 雨 例刻登 城○出かけ太田備中守隠莊に参る○道中に水戸中納言殿に懸御目候

○廿九日 くもり 例刻登 城○石川獻藏來る

○晦日 微雨○六半時過之出宅にあ 宇漏生コンシユール宿寺伊皿子長應寺に参候同國人ホンフラントに應接いたす通詞園田作之助筆者吉田賢助也○右之御用畢る同國之醫師に面會耳遠之義申聞候處得と見候る油薬くれ候

○八月朔日 雨 五ッ時登 城○水戸殿周防守殿河内守殿に懸御目候る品々申立る

○二日 晴 例刻登 城○不快に付頼合候る早退出○實方弟井上信濃守昨日御役御免唯今迄之通差扣可罷在旨被 仰渡候に付差扣之義相伺候處

書面差出に不及候旨に付差出不申候積に相成周防守殿に金阿彌を以之伺也○周防守殿に存意書上る

○三日 雨夕晴 不快に付登 城不致其旨同役方に申遣す

○四日 晴 例刻登 城○周防守殿御用部や同一同被 召候る薩英戦争之御話有之其外薩州に役々可被遣旨遠江守殿一橋殿御沙汰之節之御談有之候大小御目付外國奉行かな川奉行を委細申上候○周防守殿に 御直公方將軍号之書付壹冊取調上ル同日綱鑑補書抜に存寄書并外書付一通添上ル

○五日 晴夕くもり 例刻登 城

○六日 くもり 例刻登 城○周防守殿に懸御目候新部屋におゐて御人撰之書付上ル○同役一同に周防守殿御逢にあ 薩州に英賊参候義に付御内談有之候

○七日 晴 例刻登 城○御老若に御逢之義不申上候○溝口信濃守を鏝

貳枚返却有之候

○八日 晴 詰番也 公方様五ツ時之御供揃に上野の御佛參右に付六半時登 城○周防守殿御逢候を佛人應接之御尋御答申上る暮六半時歸宅

○九日 くもり 例刻登 城

○十日 晴 例刻遅メ登 城○久世右馬頭より樂翁公之短刀借受候を周

防守殿に上る○出懸ケ太田道醇方の參る

○十一日 くもり 御上洛御留守に罷在候面々御供之面々 御目見被

仰付右に付染かたひら麻上下着用例刻登 城御書付は五ツ半時御用番之

御老中は例刻御登 城也○羽目之間におゐて御目見太義之旨 上意有之

候○周防守殿に懸御目候を佐久間修理之義申上る暮合退出也○五時過外

國奉行支配同心飯塚伊三郎罷越逢候義申立る即刻逢候處今八ツ半時過フ

ロイス船川蒸氣に五人乗組候を品川三番御臺場迄乗込候旨申立る直に月

番竹本甲斐守方の可參旨申遣す同人にも及文通候處明日通詞に組頭差出候を及利害候旨返書來る

○十二日 快晴 宅調○内藤幸三郎石川獻藏來る

○十三日 くもり 九ツ時過登 城これは同役申合も有之候故に候○高

山隼之助出來る同人勢州湊に御難破船存命候を歸候由也

○十四日 くもり 例刻登 城○吉澤仙次高山隼之助來るいつれも對州

に參候を難船いたし候由也

○十五日 くもり夜又同し 五ツ打候を支度いたし登 城早メ之方也平

服也○周防守殿に懸御目候をいろ／＼と申上候○再ひ周防守殿に懸御目

候新聞番貳冊上る○退出七ツ時過也

○十六日 くもり 例刻登 城○虎之介在所を歸府○石川獻藏を松たけ

くれ候 ○十七日 くもり又雨 例刻登 城○周防守殿に御直に御切米御役料奉

辭候旨申上る右之趣竹本甲斐守菊池伊豫守にも追ふ咄し置候

○十八日 くもり又雨 風邪に付頼合申遣す

○十九日 くもり又雨 不快に付たのみ遣す

○廿日 くもり又雨 同斷

○廿一日 くもり又雨 石川獻藏來る不快たのみ合

○廿二日 くもり 不快に付たのみ合○道醇殿を御書來る御受申上る菊

池の書狀出す去ル十九日御切米御役金奉辭候書面同役の向差出候處同廿

日竹本甲斐守小笠原攝津守菊池伊豫守罷出候る周防守殿の差上候處御落

手に相成候旨伊豫守を申來る

○廿二日 晴 不快たのみ合也○淺野備前守方の縁女逗留之義爲相談使

者遣す○虎之介會津其外の參る

○廿三日 曇 横山鐘三郎來る同人の昨日富塚順作參候る其節咄之趣申

聞遣す○縁女之義に付淺野備前山本九十郎方の使遣す

辭停

不容易義に
付雅樂頭殿
御上京

五條亂妨

烈公 御房 大守 直左 直次 恒元 兼定 兼國 重國 助宗 方喜

○廿四日 晴 内藤幸三郎岡田備後守來る○酒井雅樂頭殿不容易義に付
急速御上京之旨柴田貞太郎を達有之候

○廿五日 くもり○昨日御達之義に付問合柴田貞太郎方の遣す

○廿六日 くもり 内藤幸三郎岡田備後守富塚順作石川獻藏市川弁吉來

る○去ル十七日大和五條御代官陣屋の浪人共立入御代官并手代共迄不殘

切殺候る以後浪人共領分いたし候間年貢半減にいたし候旨申渡候由大和

大名の家來差出候由

○廿七日 雨 内藤豊太郎來る

○廿八日 くもり 來人なし

○廿九日 晴又くもり 植田直之進來る○半日に付豊太郎來る例に付以

後しるさす

○卅日 晴 菊池伊豫守方の書狀遣す返事來る○蒲五兵衛水野彦三郎來

る彦三郎は初見也○今日も痲積に付引込養生之御届御用番の上ル

兼卷 康繼 直胤 直勝 宗次 忠吉

- 九月朔日 くもり 昨夜は新吉郎不快に付薬用
- 二日 くもり 瀬川氏來る淺田宗伯原田市三郎市川弁吉松村健之丞來
惣右衛門
- 三日 晴 石川獻藏來る齋藤源藏來る○去ル八月晦日次男孫謹吾を戸
田左近方の養子願之義願之通被 仰付候旨申來る支度金三百兩之内引移
之節百兩今般百兩家督濟之上百兩遣し候積に付昨日百兩虎之介を以爲持
遣す左近家來若園要人を受取書來る
- 四日 快晴 富塚順作來○井上の馬具馬代五十兩千疋遣す辰五郎持參
り申候
- 五日 晴 土屋大膳亮來る
- 六日 くもり 高山隼之介同權次郎根津金次郎市川弁吉來る
- 七日 晴 來人なし○會津之家來井深實右衛門外島機兵衛名代として

太郎婚姻

- 遣し候物之禮に來るたにさく鯉節くれ候
- 八日 晴 原田市三郎戸田謹吾來る
- 九日 晴 來人なし
- 十日 晴 恩田友之助誠順院様御用人被 仰付候吹聴として來る○横
山鐘三郎石川獻藏石川宗次郎來る
- 十一日 晴 原田市三郎來る
- 十二日 晴 松岡千次市川弁吉來る
- 十三日 雨無月 富塚順作來る○今日淺野備前守娘はな太郎妻願置候
に付逗留として呼迎候に付長持其外諸道具來る九荷也右に付持人并宰領
目録等差出す
- 十四日 快晴 太郎妻淺野氏名ははな御作事奉行備前守之娘也媒人は
御小性組山本九十郎也今日内々引移これは縁組願差出置候得共未御達は
無之然ルに 御上洛之御沙汰等有之候に付元來當三月引移之積之處太郎

京地御供に付延引いたし候故也年輪十四才也右に付親類共呼候處井上信濃守は差扣同人伴藤左衛門御目見遠慮中内藤幸三郎夫婦は病氣に付戸田謹吾并九十郎而已來る侍女朧は松村良右衛門妻取計申候○元家來共其外來る

○十五日 くもり又晴 土屋大膳亮横山庄三郎箕作秋平來る

○十六日 雨 よめ三ツ目之祝ひに付家來共酒爲給候高山隼之助兄弟來る軍書講釋等有之候

○十七日 雨夕晴 窪田次部右衛門高山隼之助内藤豊太郎來る齋藤源藏同斷

○十八日 晴又くもり 和泉守殿城代關善左衛門逢之義申越返書遣す

○十九日 微雨 紅葉山に 御參詣之旨昨日同役の廻狀來る

○廿日 くもり 内藤豊太郎戸田謹吾來る○永井復右衛門同斷

○廿一日 雨 石川獻藏來る

○廿二日 くもり又雨 關善左衛門來る眞綿くる、挨拶に唐筆遣す○原田市三郎内藤幸三郎來る

○廿三日 くもり又雨 來人なし

○廿四日 晴七十一度 太郎縁組願之通被 仰付之○戸田謹吾來る

○廿五日 くもり又雨 畑山角太郎内藤豊太郎來る

○廿七日 晴 松村忠四郎井上藤左衛門來る○佐渡地役人共參る葛井うきたこくれ候○自分無足に御奉公いたし度旨御内慮之書面差出候處一通之願書にいたし差出可申旨有馬遠江守殿の御書取を以同役の被仰渡候旨菊池伊豫守の達し有之候○御書取段々申立之趣も有之候間御役御免願書差出候様同役共之内の口上にて可達事

○廿八日 くもり○小栗豊後守の御役 御免願之一件帳取に遣す○菊池伊豫守方の書狀遣す

○廿九日 晴 病氣に付御役 御免願遠江守殿の同役を以進達○右に付

御殿の用人使者を以差出一件帳に詳也

○十月朔日 雨 來人なし謹吾養子願之義相濟候に付いはひ重所々に遣
ス

○二日 晴 原田市三郎關糾來る

○三日 晴 戸田謹吾來る○明四日四時登 城可致病氣に於出仕難相成
候は、名代可差出旨水野和泉守殿御直書到來則家君の受書差出并同役田
村肥後守方の名代頼之使者差出明四日名代差出候旨之御受書和泉殿の家
來を以差出す

御役御免之
件也
○四日 晴 名代として同役田村肥後守罷出る同人の水野和泉守殿御渡
之御書付相渡隠居料三百俵被下之 願之通御役御免被成候得共御用有之
候節は登 城年寄共宅の御用向相談之義も可有之○廻勤之義は内藤幸三
郎御老若不殘相廻○肥後守の挨拶之使者差出候其外一件帳の記し候

○五日 くもり微雨 太田道醇殿の書狀出す

○六日 雨 田村肥後守方の看遣すこれは同人四日之名代相勤候故也

○七日 快晴 戸田左近方の遣し謹吾さと開として參る左近も參候若園
要人夫婦は媒人之わけに於來る山本彌三郎も來る其外親族は病氣等に於
不參

○八日 快晴風 北條平次郎來る

○九日 晴 内藤幸三郎來る同人話クサリ松平播摩守家來飯田佐織

○十日 晴 石川獻藏富塚順作來る

○十一日 雨 來人なし

○十二日 雨 内藤豊太郎原田市三郎來る

○十三日 晴 高橋美作守北條松之丞來る

○十四日 雨 淺田宗伯來る

○十五日 晴 よめ淺野氏さと開おさと并新吉郎參る太郎には牽出物と

して賀州高平之刀贈り被申候自分はしめ家來共迄いろく被吳候
 ○十六日 晴 井上之小一郎を使に差越
 ○十七日 晴 老婆共の僧日蓮忌日之食事爲致候
 ○十八日 晴 昨日石川獻藏來る
 ○十九日 雨 齋藤源藏富塚順作來る
 ○廿日 晴風 來人なし永田一琴兩三日已前病死之由
 ○廿一日 晴夕くもり 土屋金六川上新兵衛内藤豊太郎戸田謹吾來る
 ○廿二日 雨 來人なし大越貞太郎より退休之怡として看來る
 ○廿三日 晴又くもり 内藤幸三郎來る長州の參候御使番中根宇之吉千六
 石御軍艦に於長州に參り上陸之上旅宿の何とも不知多人數夜中切込候處
 宇之吉返る玄關の招出候を狼藉もの、後口を切かゝり三十余人の疵附其
 内四人は即死宇之吉も手負候を切腹候由右は長州之人を宇之吉をのせ參
 候御軍艦之人々にはなし之由宇之吉一同參候御徒目付御小人目付其外家

中根宇之吉
變死

原田の長
考貸遣す
十月晦日返
却

來共不殘切死いたし候由宇之吉家内之内一人中間を取立候を徒士に相成
 候もの宇之吉の差圖に於狼藉もの切込候節旅宿を立去候を晝夜江戸表
 の參候を右之始末申立候由宇之吉旅宿の切込候ものも宇之吉之取計に感
 服候を銘々宇之吉之血を一口ツ、吸候をあやかり度勇士之旨申候由是も
 長州人之咄之由也
 ○廿四日 晴 原田市三郎戸田謹吾來る市三郎の長歌考かし遣す夏かけ
 自分自筆也
 ○廿五日 晴 畠山角太郎來るこれは同人一橋殿御供にて上京いたし候
 故也但御船也御近習番所の六挺からみヒストン拜借之由驢として直たね
 之小刀を遣す且革の帶とり遣すおさとよりは古川玄珍之銀無垢之小つか
 遣す圖は鶏也
 ○廿六日 晴 高山隼之介來る同人方の參候盲人林長來る此もの國學こ
 と其外樂之義相咄す

○廿七日 くもり 永田義次郎富塚順作戸田謹吾來る
 ○廿八日 快晴○原田市三郎來る綿子くれ候○前田健次郎來る
 ○廿九日 くもり又雨 石川獻藏來る
 ○卅日 晴夕くもり 來人なし○昨日隱居料之御證文下る太郎持歸書替奉行の遣し候くら宿にも申遣し候

○十二月朔日 晴 原田市三郎窪田次部右衛門市川弁吉來る窪田より牛肉并セテ一フルくれ候窪田の貝のむきみ其外遣し候
 ○二日 晴 成島繁藏齋藤源藏畑山梅三郎來る同人信三郎と改名之由申聞候且同人を拙翁隱居之怡として茶具くれ候
 ○三日 晴 來人なし昨日再び 御上洛之御沙汰有之候これは京都を被召候によりて也
 ○四日 晴 原田市三郎來る同人知行之一件糺によりて也

再上洛

○五日 晴風 戸田謹吾來る
 ○六日 晴風 松村良右衛門來る○荆婦佛參夫を大越へ參候而止宿
 ○七日 晴風 窪田治部右衛門來る鶏くれ候○太田道醇より直書來る返書遣す明後九日罷越候積家來は向井傳左衛門河島七兵衛也○御上洛被仰出候に付惣出仕

衣服復古

○八日 晴 老釵大越より歸る市川弁吉來る差出物を刀河内の下ル
 ○九日 晴 原田市三郎來る知行所一件に付る也○晝後を太田道醇殿に參る奥にて酒なと被給候夜に入歸宅也乘馬先乘辰五郎召連候
 ○十日 晴午後五十五度也 來人なし
 ○十一日 晴 山本新十郎來る菓子一重くれ候○御切米手形御判濟にて來る○昨十日衣服之御制度復古被 仰出之
 ○十二日 晴冬至南風強し六十一度過暖○順作來るくら宿に御裏判手形為持遣候此節之日課傳習錄學的論語政記通鑑孫子英國志木馬二百カク銷其外手前

日課見合

西洋銀手前三十

座右日記

(文久三年十一月)

六十三翁ノ
修行子孫爲
策勵記之

七千内大二千大棒七百五十大刀四百五十居合百本大刀片手遣ヒ其外四百
甲冑試歩一万八千歩コノ日ハ棒曉七ツヨリ夜五ツ時マテカ、ル故に詩歌ニ
及カタシ九ツ時八ツ時ニ起候トキハ七ツ過假寐味爽ニ起ル凡夜ハ二時半
日ハ終日也○試歩ノ時槍砲ヲ荷ヒ短筒ヲ提凡三貫目ノモノヲ身ニツケ一
貫目ノ大刀ヲ帶ス

○十三日 晴風○昨夜出火淺草廣徳寺焼失也戸田謹吾石川獻藏來る

○十四日 晴 元御代官石神某手代安福大次郎老母并娘方の家來遣すこ
れは大次郎出府之途中浪人もの三人切込候而大次郎を蚊帳之上より切殺
候を同人妻浪人もの之内壹人の爲手負これ又被殺たりしかるに大次郎は
市川丈助方小侍之節々自分目をかけ遣候ものに付近々出府之由兼而申聞
候處兼而用意いたし候哉反物を出府之節持越候由に而くれたりよりて右
之挨拶として香典五百疋并菓子一折遣し候大次郎妻は浪人ものをしたゝ
かに疵附候而其疵人を浪人荷ひ逃去候由也

安福大次郎
變死

太郎
御上洛御供

御本丸炎上

○十五日 晴西北風少々也○今日は太郎 御上洛之御供被 仰付候旨奥
にて被 仰渡有之右に付家來其外心はかり之祝酒爲給居候内くれ六時頃
平川口邊出火之由に付太郎は直に出馬自分事隠居には候得共兼而御用之
節は登 城之被仰渡も有之其上此節殊之外物騒敷砌に付心配候而用人虎
之介士辰五郎豹藏召連士分之ものは槍を銘々相携候而駈出申候御門々々
に而改候上相通申候馬と槍は辰五郎の申付候而下馬札脇に差置百人番外
はり前に御使番立居候而改候間右之趣相名乗候處名前記之候而見計消防
之差圖いたし可申旨申之御持番所前迄參候處一圓之火に而可參様無之必
吹上ハ 御立退と存候而家來一同同所に參る御門外に而笠を取候而家來
は御門内に差置御庭構外ハ爲待候而壹人に而御庭内に參る 上は御機嫌
克御茶屋の御立退候而布衣以上之面々罷出候もの共ハは 御目見も被
仰付候由に付奥之方の參候處不案内にて不相分其内御目付杉浦庄一郎參
候間御機嫌相伺候而暫咄なといいたし候而元之場所ハ參候處大目付大久保

豊後守并若年寄いなは兵部殿平岡越中殿被居候お懸御目候お豊後向ひ候お何ぞ非常御備之御場所所有之候は、老人には候得共死候計之御奉公はいたし候積之處夫々御備も相立居申候暫扣居候様と申たるかことくなれ共混雜にて不相分候間人々と申談なといたし試候得共中々以不行届候に付退散候九ツ時歸宅也太郎左衛門尉罷出居候旨は御小性頭取竹本隼人正を以申立候由○御城は二丸まで御炎上にも眞の丸御焼失也

○十六日 晴 ○原田市三郎富塚順作來る ○新家直太郎頭を申達之義有之今日罷出候處昨夜之騒に流に相成申候

新家出役

○十七日 晴 新家直太郎かな川定番役出役被 仰付之來人なし

○十八日 晴 市川弁吉來る

○十九日 晴 來人石川獻藏也

○廿日 晴 來人なし

○廿一日 晴 戸田謹吾内藤豊太郎來る

會計

○廿二日 少々くもり風 井上を書狀來る ○新家直太郎今朝六半時横濱表に出立家來二人貸遣し候

○廿三日 晴 小網町邊出火 ○井上を度々文通雜事也

○廿四日 晴 戸田金吾來る 一保字小判拾壹兩一古壹分金五拾兩一古貳分判三兩貳分一同九兩貳分以上四口を貳百拾貳兩貳分貳朱 ○三百六拾三兩壹貳三〇一甲金貳兩貳分△印を五百八拾五兩貳分貳朱外七百兩預ヶ金以上遣ひ方に不致分

一貳拾兩壹分小道具拂代一三百拾八兩貳分貳朱口々以上遣ひ方

○廿五日 晴 昨夜井上藤左衛門方へ參る

○廿六日 晴 昨日土屋大膳亮來る

○廿七日 晴 友野肩吾來る ○今日寒入也 ○戸田敬次郎吹上詰被 仰付

吹聽として來る

○廿八日 晴 淺田宗伯富塚順作來る

○廿九日 晴 寒中に付書狀其外來人別に不記○蝦夷の狀を出す

○十二月朔日 晴 明神下函人方に着込遣す

○二日 晴 昨日を少々不快に付日課書藉計にて武伎なし

○三日 晴 太郎今日の出勤○直太郎事敬次郎と改名之旨申來る

○四日 晴 良右衛門順作遣し物之禮に來る

○五日 くもり 前田健次郎來る福山繁藏かな川定番役被 仰付候旨之

吹聴として來る兒島竹次郎定番役同斷○松村忠四郎來る鞘其外くれ候

○六日 くもり 松村健之丞かな川定番役出役被 仰付候吹聴として來

る

○七日 雪 太田道醇殿に使上ル○所々を寒中之使ひ來る

○八日 晴 福山繁藏横濱へ參る暇乞として來る

○九日 くもり 太田道醇殿を看被賜候○原田市三郎來る○青馬貳拾貳

兩貳分に賣候辰五郎に貳兩貳分は遣し候

○十日 晴 小林金藏原田市三郎敷山徳次郎内藤幸三郎來る○四ツ時松

平對馬守小川町を廣小路出火に付太郎登 城

○十一日 晴 三春産之駒を買申候此代金貳拾五兩○窪田治部右衛門西

國郡代被 仰付候に付右怡として贖をも兼肴并反物遣す

○十二日 晴 敷山篤次郎植村信太郎來る○内藤豊太郎來る金拾五兩立

替遣す

○十三日 晴 高橋古太夫殿に參る

○十四日 晴 松岡専次郎來る大坂に之暇乞也○土屋大膳亮佐久間伴五

郎來る

○十五日 雪 來人なし○太郎 御上洛御供之刀出來

○十六日 晴 煤拂いたす右に付井上藤左衛門方に參候○窪田次部右衛
門來るかもくれ候

○十七日 くもり夜雪 大越貞五郎原田市三郎來る
○十八日 雪夕晴 もち搗○高山隼之介市川弁吉來る兩人共明日乘船之暇乞也

○十九日 くもり 忠四郎方は知行所之問合に遣す○河野榮之助來る

○廿日 雪 原田市三郎戸田謹吾來る

○廿一日 くもり微雪 井上之貸地之義相談として來る使者小存意なき

御上洛被下物

旨申遣す 御上洛に付太郎は被下物御反物代十二兩貳分銀七枚白羽二重壹疋金七十兩拜借被 仰付之銀貳百五十枚支度入用也其外十六人扶持壹

倍之御扶持被下之

○廿三日 くもり 昨日太郎文武出精に付 御休息におゐて 御手つか

ら御反物貳反被下之○敬太郎之書狀來る

○廿三日 晴 松村良右衛門來る大熊藤一郎來る

○廿四日 晴 石川獻藏富塚順作來る

○廿五日 晴 來る人なし 御上洛之節太郎は御船に御供に付家來共并馬陸に於今日出立用人土岐虎之介并侍貳人中間三人也

○廿六日 晴風 淺野備前來る戸田謹吾來る岡田備後守其外追々來る

○廿七日 晴風 太郎六半時供揃に於築地海軍調練所に參り同所に於

御目見御別船に於御供いたし上京也 將軍家は五ツ半時之御供揃也○用

人は土岐虎之介其外は廿五日に陸を參る太郎之船は薩州之御用立候大鵬

丸と申蒸氣船也

○廿八日 晴 窪田次部右衛門原田市三郎并元家來等歲暮に參ル

○廿九日 晴 石川屋の金三百兩下ケ三百兩之沾券證文取之

○卅日 晴 辰五郎を兩菩提所に代參として遣す

千里飛鴻

文久三年癸亥

○四月八日 友たちの久しき旅寐には必日記しるして遣すことわか昔よりの例也此度の太郎 御上洛の御供は三四十日には歸りもすらむと其ことなかりしに二月十三日にかり初の如く駒のはな向して日ことに今か今かと歸りのこと打よりてかたりたるに屢京都の被 仰出もかはり候而此節之風聞にては三月十七日廿三日に 特勅も有て御滞京にて攘夷の事と相成候由さらはいつ歸候而逢らむとの事もあらずと此日記を記しはしめたり万一之御事あらむには忠節に死し可申は勿論に而其事に付而は兼々屢申遣したればよもや御忘れはあるましく候得共大節に臨候而不可奪は君子也君子の所業なれば容易に御思ひなく朝夕共に無斷絶御心かけ可被

千里飛鴻 (文久三年四月)

百九十五